

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

9



第七十二卷

第九号

日本幼稚園協会

読書の候……保育書に親しむ時

倉橋惣三選集 〈全4巻〉

わが国の幼児教育の基礎的な理論を集成。

第1巻 幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル

第3巻 育ての心・就学前教育

第2巻 幼稚園雑草

第4巻 保育案他

B6判・各巻 1,200円・〒140円

保育学講座 〈全10巻〉

保育学に科学的な基礎づけを加え、オリジナルな資料や、綿密な調査によって、現代保育の方向性をさぐる全10巻。

- | | | |
|------|------------------------------|---------|
| 第1巻 | 幼児教育の原理と方法…………… | 荘司雅子著 |
| 第2巻 | 保育課程…………… | 鈴木信政著 |
| 第3巻 | 日本の保育制度…………… | 岡田正章著 |
| 第4巻 | 現代の幼児教育—海外の動向と進歩—…………… | 小川正通著 |
| 第5巻 | 幼児の生活指導…………… | 山下俊郎著 |
| 第6巻 | 子どものしつけと性格—乳幼児期から中学期まで—…………… | 児玉省著 |
| 第7巻 | 子どものおもちゃと遊びの指導…………… | 松村康平著 |
| 第8巻 | 幼児の身体発育と保育…………… | 平井信義著 |
| 第9巻 | 日本の幼児の精神発達…………… | 日本保育学会著 |
| 第10巻 | 幼児の両親教育の研究…………… | 村山貞雄著 |
- 日本保育学会監修 A5判・上製本ケースつき・各巻1,200円 140円

日本幼児保育史 〈全6巻〉

日本保育学会著 日本保育学会の共同研究。全国的に貴重な資料を集録。

日本で初めて大成された書です。

第1巻・江戸時代～明治前期

第3巻・大正期

第5巻・終戦後期～昭和24年

A5判 256頁 900円 140円

A5判 352頁 1,200円 140円

(近刊)

第2巻・明治後期

第4巻・昭和前期

第6巻・昭和24年～昭和30年

A5判 304頁 1,000円 140円

A5判 336頁 1,400円 140円

(近刊)

フレーベル新書

幼児教育界をリードする新書判シリーズ

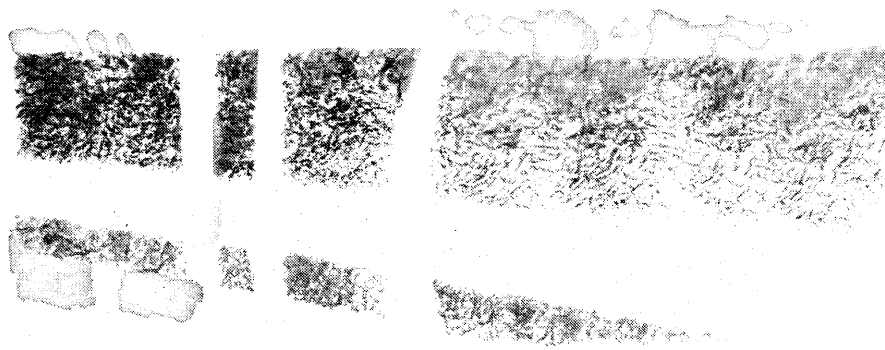
- | | |
|-------------------|---------------------------|
| 1 リナはどうやって文字を覚えたか | フリードリヒ・W・フレーベル著 荘司雅子訳 |
| | B6変形判 152頁 380円 80円 |
| 2 保育者への一つの指針 | 平井信義・乾孝・金沢嘉市・城戸幡太郎・八杉龍一共著 |
| | B6変形判 180頁 360円 80円 |
| 3 対談しごとと生きがい | 〈聞き手〉多湖輝 |
| | B6変形判 192頁 360円 80円 |
| 4 楽しい遊び〈室内・園庭編〉 | 日本児童遊戯研究所編 有木昭久・湯浅清四郎共著 |
| | B6変形判 144頁 300円 80円 |
| 5 楽しい遊び〈伝承遊戯編〉 | 日本児童遊戯研究所編 有木昭久・湯浅清四郎共著 |
| | B6変形判 144頁 300円 80円 |
| 6 楽しい遊び〈園外編〉 | 日本児童遊戯研究所編 有木昭久・湯浅清四郎共著 |
| | B6変形判 144頁 300円 80円 |
| 7 自然物のおもちゃ | 滝田要吉著 |
| | B6変形判 152頁 360円 80円 |
| 8 私の幼児教育論 | 三木安正著 |
| | B6変形判 176頁 400円 80円 |

以下続刊

幼児の教育

第七十二卷 第九号





幼児の教育 目次

——第七十二卷 九月号——

表紙
カット
赤坂三好
斎藤信也

©日本幼稚園協会

1973

幼児教育への反省……………堀内 康 人…(4)

★講演 視野をひろげて

—教育の貧寒化を憂える—……………周 郷 博…(9)

紙一重……………堀 合 文 子…(21)

私の保育……………長 井 洋 子…(24)



保育実践の試み

―時代の流れと幼児の社会性―

加藤 定夫……………(31)

日本ザル幼児の保育ノートから(つづき)

浅見 千鶴子……………(36)

読書のすすめ

外山 滋比古……………(44)

南 信子

江波 淳子

岡 政先生会見記(その二)
幼児教育の源流(Ⅷ)

小野 京子……………(48)

ロバート・オウエンの幼児教育思想(その一)

山根 祥雄……………(53)

★調査報告

幼稚園児の教育費について(3)

井手 達子……………(62)

金田 和恵

馬場 紀子

横田 京

幼児教育への反省



堀内 康人

どんな本の中で読んだのか記憶がはっきりいたしません。が、プーシキンがこんなことをいっていたようです。

「文学というものは地上と天上を統一するためのものだ」と。どうしたことか、私の頭からいつもこのプーシキンのいったことが離れません。地上というのは具体的現実のことであり天上というのは抽象的世界のことでありましょう。さて私は文学についてこれから語ろうとするのではなくありませんが、多くの学者を含めて、幼児教育の現場の教師・保育者がプーシキンのいったように、たとえそれは文学ではないにせよ、子どもというものや子どもの生活を言葉によつて的確に説明し、理解し、それをも

とにして正しく指導しているのだろうか、ということを考えて、必ずしもそうなっていないことがあまりにも多すぎるような気がいたします。なぜでありましょうか、それは言葉が現実から離れて独り歩きをはじめ、いつの間にか具体的な現実の複雑さを根気強く追いかける努力を放棄し、その代りに教育学者や心理学者の作った言葉でうまく格好をつけ、それでおいしい味付けがかわった、食べてごらんない、おいしいでしょう、というようなことが多いからです。ですから無理ごもつとも感想はあっても、そこから子どもの生活に、ぐんとせまり、「そうか、こうして見ようか」という指針のよう

なものがでてこないのです。ちょうど「秋」について子どもに書かせた作文、いわゆる美文調、「秋は良い季節だ、天高く馬肥ゆ、天神山のもみじも色づき、谷川は澄んで流れる。秋はほんとに良い季節だ、灯火親しむ候だ、さあしっかり勉強しよう」といった調子が多く、「秋になった、山が紫色になったぞ、あけびをとりにいこうかな」といった子どものレアリズムから受ける感動のようなものがあります。そこで私は、きちんとしたことをしゃべりきちんとした指導をするためにも、私どもがしらずしらずのうちにおかしている考えの上の誤りについて反省をして見たいと思います。

一、あれかこれか、という考え方の誤りについて

あの子はひねくれているがこの子はひねくれていないなどとはよく子どもの問題で話に花が咲きます。私どもは決してそれが絶対的にそうだというのではなく、それぞれが相対的なものである、ということとはわかっていながら、つい断定的なもののいい方をしがちなものです。ちょうどはげ頭のようなもので、頭の毛がうすくなる過程をとおしてはげ頭が進行するのですから、それと同じよ

うに子どものひねくれも過程的に、もっと具体的に説明される必要があるのですが、それが大変骨の折れることなので、その骨折りをやめてきめつけ主義がまかり通ってしまうのです。これでは決して教育的効果をあげることはできません。

二、どんなことにも基本的に対立したものがふくまれているので、それを統一しなければならぬという考え方について

Aという子どもとBという子どもは仲が悪いと仮定いたしましょう。ではどう考えてもこの二人の子どもは仲が悪いのでしょうか。仲が悪いに対立したものとして仲の良いということがありますが、この二つの対立物はとても相いれることはできないでしょうか、そうではありません、それは対立していても統一ができ、統一しなければなりません。それが教育というものです。心理学者がよくやるソシオメトリ的技法で、子どもの離合集散を記録して集団構造などといって調査をしますが、あれは教育をする上の参考資料にはなりえますが、教育そのものとは別のところにあるものだということを忘れない

てください。仲の悪いAとBは条件的で一時的そして相対的なものであり、状況が変われば、状況を変える努力をすればAとBは仲良くなるものなのです。ここでもまた私どもはこうした状況を変える努力が大変なので、ついでばらをきめこんで「ほんとにこまったものです、AちゃんとBちゃんは仲が悪くて」という説明や理解で済ましがちになります。

三、物ごとをたがいにきりはなして、それだけで考えるのではなく、いつも他の物ごととの相互関連において考えなければならない という考え方に
について

幼児教育にかぎらず、すべてのことについて、こうした考え方が必要であることは誰でもよくわかっているはずですが、子どもたちのあれこれの生活について話し合ったり、ある子どものやりにくい保育に頭を悩ましているうちに、ついその子どもや子どもたちの生活の一面面だけに気をとられ、それとちがった側面や、子どもを取巻くちがった条件や要因と関連させて考えることを忘れがちです。そうすると、また例によって、いつもの悪い癖がでてきて、出来上りの言葉がでてくるのです、すな

わち「この子どもは発達がおくれているのですわ」と。これでは心理学や教育学の用語が教師や保育者のために逃げ道を提供しているようなもので、現実解決のためにはなんの力も与えないことになってしまいます。

四、物ごとを、その運動、生成、消滅において考えるという考え方について

私どもはとにかく、子どもがこんなことをするようになった、こんなことをしたというような側面を問題にします、そのことじたい決して間違いではありませんが、もう一つの側面、すなわち、子どもがこんなことはしなくなったという側面をいうこともまた大切なことです。この問題は脳生理学の分野で、神経支配に関連させて考えると結局興奮と抑制の問題や消去の問題にかかわり合いのあることで、正しい興奮がたつたためには抑制が正しく働くようにならねばならないし、子どもの行動のステレオタイプ（常同型）の形成（簡単に習慣の形成といっておきましょう）において状況に合わないものがすこしずつ消滅し、新しいものがじょじょに作り上げられ、ある時期になると突然新しい様相にかわるのです。こう

した考え方で子どもの発達を見るためには、根気強い系統的な観察が是非必要になってまいります。子どもの発達の過程というものは、いつも同じ変化の循環をくりかえしつづけているのではなく、何か新しいものがたえずあらわれ、その反面古いものが消滅しながら、一つの段階から次の段階へと前進していくものなのです。

五、量的変化から質的变化への転化という考え方

まず自然界の姿を考えてみましょう。たとえば毛虫がだんだん大きくふとくなり、それから自分でマユをつくり、最後に蝶になります。量的変化から質的变化への転化がはつきりわかります。子どもの精神的発達に関してこんなはつきりした転化をみることはできませんが次のような状況をよく観察しますとこの考え方がやはり適用できると思います。すなわち、これまでブランコに他の子どもが乗っている所にかけていった子どもAは、なにがなんでもぼくが乗りたいから、おりてくれといっている。そんなことを繰返しているうちに、ぼくが乗りたいが、他の子どもも乗りたいのだということを発見します、それも度々のけんかや意地悪を通してです。こう

したことがたび重なると、教師のアドバイスがきっかけとなって、そうだ順番をきめ、待つことをすればあらそいもなく必ず乗ることができるようになることを発見するようにあります。ブランコに乗るといふことと、一台のブランコに数人の子どもがあらそうことなく乗るためのルールを作るといふことは質的にちがったことなのです。こうしたことはとりもなおさず精神発達の事実であり、こうした姿を幼児の教育の過程で、個人的にも集団的にもたしかめていく必要があります。

六、物ごとの様々な過程であらわれる矛盾およびその矛盾の結果やあらわれ方を理解することによって、物ごとの過程を理解することができ、またそれを統御することができるという考え方

なんの矛盾もなく同じことが繰返されている姿を想像することはできても、現実と同じことが繰返されている過程などというものは一つもありません。子どもたちは、ある時間空間の中で、それぞれその要求をみられますが、次の瞬間には新しい要求が生まれます。ですから子どもの心はいつも同じところにとどまらないで、変化いたし

ます。どんなクラスにも力づくで他の子どもを自分の配下に従えて、荒々しく振舞うボスの存在がおるものです。こうした子どもは、言葉も荒々しく、「おいもって来い」だとか「これやれ」だとか命令的口調です。こうしたボスの存在をどのように統御し教育したらいいか教師の頭痛の種になります。こうした子どもは教師の意図の裏をかいて、子どもたちの遊びの場をかき乱し、教師を手こずらせます。こうした場合その子どもに対して、つい「どうしてそんなことをするのですか、やめなさい、いけません」を繰返していても決して効果はあがりません。それよりもその子どもを含めて他の子どもが興味をもってやる活動をたくさん用意し、それを質的に高度なものにしていくことです。

たまたま活発に活動を展開しているグループの中にまぎれこんだボスは、その活動の外にあって気まま勝手にしていたので、その活動がのみこめないと、つい他の子どもに「これどうするか教えろ」ということになります。それに対して他の子どもたちはうまく抵抗します、すると「教えろ」が「教えて」に変化します。そうかんたんにすぐそうなるというわけではありませんが、このよう

にしてこのボスの存在はいろいろな矛盾につき当り、行動をかえていきますので、教師はそのあらわれ方に注意しながら適切な教育を展開していけば、どんな子どもでもボスの存在でなくなっていくものです。いわば子どもを矛盾的状况においこみ、その中で矛盾を発見させる教育とでもいいましょうか。

そのほかさまざまな問題がありますが、予定の紙面の都合でペンをおきます。



◇ 講演 ◇

視野をひろげて

— 教育の貧寒化を憂える —



周 郷 博

自然とともに

私は 幼稚園長を四月一日にやめて……エープリルフールで
す……、そして、二カ月ばかりたって、多少落着いてきました。
というのは、覚悟ができてきたっていうことなんです。それに
したがって、今住んでる家のまわりの自然が、みどりになっ
てきますからね、ぼくとしては、忙しくなってくるんです。一言
でいうと、ぼくはこのごろ、畠きちがいになりました。

けさも、五時ごろに目が覚めたら、かっこうが鳴いてました。
だから戸を開けて、ねまきのままで畠仕事をしました。少し寒
いくらいでしたが……。とにかくこういうことは、自分の手で

やらなくちゃだめです。手でさわると、土はあたたかくて、ち
よっとしめりつけがあるんです。一月くらい前に、堆肥をかき
まぜるのをやりました。山の枯葉をとってきて（これなかなか
大変なんです）菜種油の油粕をまぜて、よく指先でまぜます。
きたない、なんていつてちゃだめです。ぼくもずいぶん爪がき
たくなりました。彫刻するみたいに地面をひっかきますから
……。

で、草刈りもやります。かっこうが鳴いたといいましたが、
四、五日前はほととぎすも鳴いていました。今、山はほった
かします。くずのつるっていうのは木にからんじゃいますね。
木が苦しそうで、ぼくはそれをとってやるんです。一人でこん

なことをやってると、ぼく、何をやってるのかな、と思うし、人もまた何と思うでしょう。ぼく自身も、ぼくはついに妖精になっちゃったのかな、なんて思います。この間も、草を刈りながら、お前たちは道に生えるのならいいけれど、木からんじやいけないよって引っぱって、ステーンとこりんじやつたりしました。でもぼくは何となく楽しいんです。そうしてやらなきゃ木は枯れちゃいます。こんなことをやってると疲れたことを忘れて働いてしまいます。自然とか、大地とかいうものは、それだけ人をひきつける力があるんだなあ、と思います。

ですから、くたびれるくせに健康、少なくとも精神的に健康だと思えます。栄養なんかそんなにとらなくても、やるべきことを一生懸命やってる方が健康です。

こういうふうにはぼくは、百姓きちがいみたいになって、作物を育てること、自然、地力を回復するために働いています。そして、ぼくは幼稚園長はやめたけれど、せまい地域といえども、この日本の大自然の園長であると思います。人間のつちあげたものなんかではない、園丁、そう、堂々たる幼稚園の園長です。

こういうことからすぐに幼児教育の問題にもっていきたくはないんですけど、やはり地力がだめになったようなものが、

日本の教育界にあるように思います。化学肥料を入れて、農業なんかを使った、何か粘りのない、軽くなっちゃった、大地の地力に相当するようなものが、どんどんぬけおちちゃっているような気がします。教育というものは、地力がなくなればなくなるほど、カラカラに乾いています。何かいろいろと理くつをつけて飾りたてている、そんなことをやってるような気がします。

環境としての自然

ぼくは前に、脳のどこが、どんな働きをしているかについての本を読みました。言語、思考の中枢は左にありますから、右手と関係があるわけです。ことに人間は肺が左の方によつてますから、右手の方が使いやすいわけです。ぼくの母は左ききでしたが、脳の右の方は片輪にならない、バランスをとる働きをするんだそうです。いずれにしても、手を使わないと、言語も、見るという世界も、自分のものとして本当につかんでいるということにはならないと思います。

これは、幼稚園をやめるころから考えてたことなんですけれど、人間の中枢神経っていうのは、他の動物より長くできていて、背ずいを通して手足の尖端までいっています。ですから、

手足は使わなければだめなんです。足だって移動させなければいけません。高い所へ上るのにも自分の足を使えば大きな展望ができます。だんだんと視野がひらけてくるといふ驚きもあります。こういうとをやらずにいると、頭がいいといつても、言語を覚えたといつても、その言葉がうわずつていて、やたらにしゃべるというか、やたらに考えているみたいだけれど、本当に大事なことを考えているわけじゃないんです。

こういうことはかりしていると、人間の神経の働きがまさに伸びがないという状態がおこつてきていると思います。モンテッソーリは感覚教育、といいましたが、しかし感覚というのも、受身だけでなく、自分で本当にやって見なければ、自分の感覚を自分で調整して作り上げたいことにはならないでしょう？ やはり基本的に人間は、自分で自分を作り上げていくものです。畠の作物だってそうです。自分で自分を作り上げようとしていくわけです。それに関して、ぼくがこういうことがやれて、その物の成長のプロセスにどういう環境を作つてやることができたか、ということが基本だと思ひます。

その環境つていうのは、ふつうは物質的な環境みに、狭いもののように思われています。しかし、環境というと社会もむろんあります。家庭、社会の人々の仕事、表情などもありま

す。そういうものの全体を支えているのは結局、自然なんじゃないかなと思います。

三十年もフランスにいて、十六年ころ前に日本へ帰つてきた高田博厚さんという彫刻家がテレビでいいました。『ヨーロッパの自然は感情をもっている』と。ヨーロッパ人の思想、イメージ、行動、価値観の根になっているんです。われわれはそれを忘れていると思います。そういうものを切っちゃって、幼稚園のカリキュラムの中で、感情をどう育てるか、なんていつたつてだめです。自然が感情と思想をもっているという大胆ない方、ヨーロッパではまさにピタリなんです。

ヨーロッパの自然には音楽がある、とぼくは前にもいいました。雲の動き、草原のひろがり、自然自体のひろがり、深い青空まで含めて、それ自体音楽です。ああいう自然があったから、ベートーベンやバッハのような人もイギリスへ行つたヘンデルのような人もあいう曲を作つたんです。あの自然を全部破壊していたらこの人たちも出てこなかったでしょう。自然が思想、感情をもっている。ぼくたちはそれを忘れてるんじゃないでしょう。何か人がでつち上げた環境、よごされた食物、特売品、ぜいたくな家具、そんなものを環境だと思つてゐる。もつと悪くいえば、金があれば子どもはよくするように思つていま



ヨーロッパの自然

すが、これは全く今、逆です。金がない方が子どもはいいんです。

自然の美しさ、風景というものがわれわれの心を作っている、それをこわしてしまえば心のよりどころがないわけです。これも一つの重要な問題です。六月五日は世界環境デーです。まさに人類全体が幸福の問題を考えなきゃいけないと思います。自然とたち切られた箱のような家の中に入って、見せかけだけの食物を食べて、生きている生命が育つはずはありませんね。

高田さんは、〃感動、本当に感動するときはびしいんですよ〃といいましたが、本当にそうだと思います。今の日本じゃそんなこと、ないんです。感動するとうれしい、うれしいなんていうのは感動じゃないんです、甘たれてて……。本当に感動するときはびしい、そこまで今の日本人は行けないんじゃないか、と思います。芸術作品にしても、音楽でも、また自然というものは何て大きくてふしぎだろう、と思えば、星空をただ、〃きれいな〃なんて見てる、そんなのです。本当に感動したら、この無限の天空の下にぼくが一人生きてる、さびしいはずじゃない？ しかしさびしいって世間でいうのと少しちがいます。自分の小ささ、それを認めて、その小ささ、無力さもちたえていかなきゃいけない、そして大きなものとの関係がどうし

たらつくだろうか、そう考えたら本当の感動はさびしいはずであって、それなしでは成長も起動力もおこってこないのです。

こじば

興味、好奇心、関心、これみんなほん訳語ですが、いったいこれは何でしょう？ 教育の世界では、特に教育の世界ばかりでなく、言葉じりだけで、はやっていることを言葉だけで覚えて、何かわかったふりをするのが日本人の性格で、また戦後の風潮ですね。しかし言葉は実体をもっているんです、いるべきものです。

きょう丸善で至光社の武市さんと話しましたが、武市さんは、親切という言葉についてこういいました。ばくも前から親切っていうことはただベタベタすることじゃないかと思っていました。ところが武市さんは、親切の「切」は「切らなきや」いけない（切だ）っていうんです。ところが今の親切は、切らないで接するという「接」という字を書くんじゃないかっていいました。接客業のようにただくっつくんです。親しさを切るというのが本当の親切なんです。切るというのはさびしいけれど（「親しみ」の「切なるもの」か）、やはり人はその人自身にしてあげなきやいけないわけです。死ぬ時はだれでも一人で死ぬのです。

だから人生は切らなきやいけないことがたくさんあります。にもかかわらず、人間として親しさというものがなければ生きられません。親しさもただ人からうけるだけでなく、人に対しても表わさなければなりません。それが親切です。

日本人は言葉をいろいろと変に使ってしまいましたね。特に週刊誌などで……。言葉は使う人によってこわされちゃうわけです。よごれた心をもった人が手段として使えば、言葉は死んでしまいます。変色、変質してしまいます。言葉の実体まで変わっちゃっています。さっきの「親切」の実体もないんです、ベタついて、かんぐっていえば、親切にしているみたいだけれど腹はちがう、本当に無邪気な、親切な、人と人とのつながりを見いだすことは少なくなりました。

ちよっと思いましたが、このごろの高校生に「恋愛」という字を書かせると上は野蠻の「蛮」、下が虫になっちゃって、「愛」という字は心をとってしまっ受けるという字、「蛮受」になるそうです。恋愛というのはやばんなもの、行為をうける、そういう字になって、何か実体までそういうふうになってしまいました。本当の恋愛がなくなってきたんです。だから「蛮受」だったんだから、結婚して子どもができる。その「蛮受」の仕返しに子どもを殺してもいいということになるのかもしれない。

ヒステリー・ノイローゼ

齊藤茂太さんがいつか、日本の人口の60%は今やヒステリーで、やっともたしているが本当はヒステリーだと本に書いたりテレビでいったりしてました。いつそれが出てくるかもわからない、あの人はいい人だ、なんて思っても安心できないそうです。ところが昨日のテレビでは、日本人のほとんど全部がそうだとってました。自分のことで頭の中がいっぱいで、人のことなんか考えることができない、これがノイローゼの徴候だそうです。ぼくのように蟲をやつてごらんさい。ノイローゼにはなりません。夜寝ても、肥料のこととか、あの川のそばの草を刈つて、マーガレットを植えてとか考えます。朝ちよつと起きてもお天気が気になったり、忙しくてしょうがないんです。ヨーロッパへ行ってみると、経済成長よりも農業を大切にしようというふうに変わつてきています。時間をかけて育ていくものを大切にしようという思想です。ぼくは山を掃除してると、冬でも汗をビッシヨリかきます。人間は汗かかないといけないんじゃない？ 皆さんも汗、かきますか？ 汗は体の調整作用ですから、汗をかくとあとがさっぱりするわけです。体の中のだまっているものが出てくるわけです。はじめはネバネバ

した汗が出て、それでやめちゃいけません。も少しするとサラッとした汗が出てくる、そこまできなくちゃだめです。

ずっと前にきいた話ですが、小学生が遠足に行くと、年たった校長先生はサッサと歩いて、チビのくせに「つかれた」っていうんだって。汗なんか出てないのに疲れたっていつてアイスクリームなんか食べるんだそうです。

環境汚染

ジャーナリストイックな言葉でいたくはないのですが、第三水俣病とか、第四、第五もあるだろうっていわれると、ああそうかなと思います。熊本の水俣病は急性で非常にひどいものですが、今や日本中の海はみんな危険になっちゃったのです。急性の水俣病ほどひどくなくても、中枢の神経がおかされていると思います。

もう一つ大切なことは、今の日本は世の中がどんどん変わって刺激ばかり多いわけです。すると他の動物よりは長く、弾力性のある人間の神経もおかされてしまいます。こう刺激が多くて、変なことを覚えさせられたりしてるんですから、水俣病のような傷害のほかに、協力なんていうことも、協力という名前ですら中味はきれぎれであつたり、断片的な刺激的コマ

ーシャルがはらんしたりすると、大人はまだいいとして、小さい子どもの神経はブツブツに切れて伸びるどころじゃなくなってしまう。一方で、PCBとか有機水銀とかが緩慢な状態でも入ってきます。すると、形は人間らしいかっこうをしてても、中の神経は方々切れている、ということを考えてもらなさい。今は立ってます、しかしある日パソコンと倒れちゃう、人間はある程度他の動物より図々しいというか適応性がありますが、中味はボロボロ、ボロボロとまでいかなくても神経に伸びがないから根気が続かない、ちちんで切れ切れなんです。ぼくは、こういう状態が、われわれがいまおかれている環境だと思えます。

イギリスのアイゼンクという人がいったり本に書いていたりしますが、心理学は間違ったことをしている、少なくとも悪用されているといっています。そして百年前の日本は、多分非常に今とちがって人間もよかったんじゃないかともいっています。戦争に負けてから毎日どんどん今まで知りもしなかったアメリカあたりの技術なんかをとり入れて、日本人は神経さく乱状態になったんじゃないかと思えます。戦後の日本は、あまりに刺激が多く変わり方が激しくて、中から何かができてくるひまがないんだと思います。

先だって日本に季節感がなくなったという話を人もしましたが、実際の気象も変わっています。ヨーロッパも変わっています。去年の六月、パリで汽車をおりましたら迎えにきてくれた人が、〃冬だよ〃っていつてオーバーを着ていました。こういうふうには、世界中が変わっていますが、日本は局地的に、世界のエネルギー消費量の平均の七十倍も使っていると、この間竹内均さんが発表していました。こんなことでいいんでしょうか。

水なんかだつて危険だと思えます。都市にこれだけの人口が集まって、水洗便所とか、電気洗濯機とかで水を大量に使って、その上洗剤を使って泡を海に流しています。そして集中豪雨、農業の問題もあります。日本は、世界中で一番きれいな水がのめた国なんです。日本は高低のある土地で、森林の間を流していつもきれいな水が流れてきました。地下水もいっぱいあります。今はばくの家の方なんかでも、工場が地下水をすい上げるもんだから、田や畠もようすが変わってきました。地下水も目に見えないけれど、大地の中の重要な部分なんです。水と、空気と、安全は、いつでも手に入るなんて日本人は思っていますけれど、水、まさに危険です。

今も朝、顔を洗う時、水道をちょっとひねりますね。すると

きれいな水がジャージと流れてきます。きれいですよ、丹沢から流れてくるんですから……。何とぜいたくなんでしょう。山の中にいるかの如くに、ちよつとひねつただけできれいな水が出てくるんです。これ、感謝していいことじゃない？ 顔を洗ったきたない水を流しますね、これはこの先どこへ行くのかな、地面に吸いこまれてその先どうするのかとぼくは考えます。これがまた、きれいな水になってわき出してくるのならいいけれど、その循環がなくなったら、ついに水はだめになります。ぼくはこれだけ水をよごしてしまった、と考えますけれど、水を今皆は平気で使ってますね。洗濯機なんて少しやめにしたらどうでしょう。電気だってあまり使わない方がいいと思います。早く洗濯ができればいいんじゃないかと、そのために自然の一部を汚染しているわけです。

氏より育ち

人間はそれぞれ個性的な種をもって、長い種の連続として男女の間に生まれてきます。遺伝子を通じて、長い進化の歴史を伝えて一人の人間が生まれてくるわけです。これを「氏」とよんでいいでしょう。しかし「育ち」、環境がだめなら、いくら種がよくてもだめです。しかも作物でいえば、ボサッと、ゴチ

ヤゴチャ生えているとだめなんです。この環境は、ますます、不自然に作られたような自然はありますが、本当に自然とよべるような自然の環境がなくなってきました。自然は生きていて、その自然と関係をつけるということが「関心」です。この言葉の語源は「間にある」ということです。前に行ったように、感情や思想をもっている自然の中で、遊んでもいい、労働してもいい、と思います。そういうアクティブな、（自然を楽しむ、楽しませてもらう観光じゃないんです）姿で関係をもたなければいけないと思います。エーリッヒ・フロムの言葉なんかによると、そういうことによって、内臓の中に思想や感情の根がはるわけです。その根が現在には全部きられている状態です。年をつてる人はいくら根をもっていますが、もう私は死をまつただけだなんていつて……年とつてる人もつと遠慮しないではいいと思います。

木目と年輪

ぼくは今、戦後二十八年たったというのに、何か長く生きてきたという気がしません。戦前の十年十五年の方がはるかに長い道のりを上ってきたなという感じがあるわけです。戦後はいろいろ、刺激的な瞬間はありましたが、雑然とごみのように

たったただけで二十八年生きてきたっていう感じがしないでしょ。小さな子どもたちも、自然から切りはなされ、まわりにたえず表面的には興味をひくようなもの（知識というものもそのたぐいです）ばかりあります。すると、大人はまだもことがあるからいいですが、子どもにとっては、ただ時計が動いただけです。

昨日の新聞に、栃木県の方の神社で、樹齢七百年のけやきの木を売ったという話が出ていました。それを材木にするのに割って見たら、きれいな木目が出ていたそうですが、今の子どもは年輪も木目もないんじゃないでしょうか、年輪とか木目にあたるものが、人間にもあるべきです。これは外からは見えませんね。人間も同じです。その人が生まれてから生きてきた、辛い時、不幸の時、うれしい時もあつた。それが外から見えない木目になってその人、人にあるわけです。そしてそれがシユバイツァーであつたり、バートランド・ラッセルであつたり、人類の中にあるわけです。日本の現状では、子どもにそういうものができないような気がします。長い先のことはわかりませんが……。

そういう意味では、それぞれ個性があつて、外から見えないけれど年輪もあつて、それぞれ一緒にいるのが楽しい、という

のでなく、同じようなつまりロボットが（ロボットは死んでいくからまだいいけれど、生きているんですよ）何人もいたら、始終自分を目立たせようという気が（アセリが）あるわけです。ちがつた個性だからこそ、一緒にいておもしろいんです。先生の方もそういうことを考えてるでしょうか。

物との関係

ばくが幼稚園長になって二年目くらいの時に、イザヤ・ベンダサンの『日本教について』という文章が雑誌にのりましたが、それが非常に印象に残っているのでこのごろまた読み返しています。そのはじめに、

「日本人は物との関係ではノイローゼにならない。が、人との関係ではすぐにノイローゼになる」とあります。

これは全く、日本人のいけない点だと思います。人との関係ばかり気にして、物との関係、たとえば学生なんか、黒板がいくらよごれていても平気です。ヨーロッパでは、物は、人間も含めて自然の一部であるという考えがあります。高田さんがそういつてましたが、彫刻なんているのはまさに物との関係です。数学もそうです、物との関係で考えればおもしろくてやめられなくなります。成績なんていう人との関係が入ってくるのでい

やになるんです。自然科学も、労働だって、人間と自然との関係をつけることです。ところが、お金という人との関係が入ってくるとちがってきます。食物なんかも、物との関係を考えたら料理はもっと素朴であるべきです。人との関係を気にして高いお金を出してまずい料理を食べに行くことはありません。

消費文化の上ののっかって、受身の態度で大きな機械から作られたものを、消費するのが人との関係をよくする、と考えているんです。もっと、物との関係を、清潔で、味わい深いものに、エレガントにする必要があります。そうすれば自然科学の本を読まなくても自然科学者に近くなります。ぼくは今年はやえん豆をまく時期がおくれたために失敗しましたが、昨日やおやの前を通ったら、ひからびたやえん豆がならんでいました。あんなものを売る方もですが買う方も買う方だと思いました。野菜に対して気の毒だと思わなければいけません。もう少し物との関係でノイローゼになったらいいと思います。

物の背後には大自然があります。生命っていうのは大地に根をはって、爆発力をもっているものです。これは虫のつき工合をみてもわかります、いきおいの悪い芽には早く虫がつかます。たまに逆もあるけれど……。あるところまで育つと、例をとるもろこしにとると、四月にまいて八月に収穫するわけですが、

六月ごろになると、あ、きまったな、と思うわけです、そのころになってだめなものはだめです。あんな弱々しかった芽が伸びて堂々としてきます。「かけがえのない地球」という本の中に植物の光合成のことが、石油コンビナートなんかよりずっと複雑な現象だと書いてありますが、そのもっとも総合されたものが、この植物の光合成、私のいう「爆発力」だと思います。

仕上げ

さて仕上げをするわけですが、仕上げということは、人生においても、人生のある部分についても、あるわけだとこのごろ考えています。そして、仕上げはその人の主体性によって一つの区切りをつける、その人でなければできないという仕上げが必要です。先生は先生で仕上げをしなければいけないし、子どもも六歳になった、というところで仕上げをしなければいけないんです。しかも高田さんがいったように、永遠に未完成な仕上げです。自分がここに生きていたという意味では、たえず仕上げをやらなければいけない。あのことも知った、このことも知った、ということよりこの二つのつながりは何だろうと考え、自分を、自分でやらなきゃいけないんです。感情、頭、手、足がバラバラに生きていても「これが私です」というものを、

たとえ足りない部分があっても作っていくべきです。いろいろなことをいってききましたが、これから私も仕上げをしなければならぬわけです。

関心とか、興味というものは、大人になればなるほど実利にくっついてきます。しかし子どもにはそんなことは必要ないのです。ここで、つりあいのとれた人間らしい生き物として育っていく根や幹がちゃんとでき上がる、というような関心と好奇心を育てなければいけません。この好奇心というのも、日本人のいわゆる好奇心ではないんです。自分のまわりの自然、星空といった大きなものと自分を関係づける。そして行動にならないければいけないんです。しかし子どもをとりまく現在の環境は、雑然たる刺激の中で甘やかされ、接するというベッタリの「親接」ばかり、その上に大抵のお母さんやお父さんまでもがヒステリーです。食品も危険で神経にはのびがなく、手足を使った行動のすがすがしいあと味もない。昔だと、ずーっと山の向方までぼた餅をもって山こえてお使いに行ってきた、というような、やるべきことをやったという満足がないんです。いつもいいかげんなものしかみだされていらない、根気のない人間ができつつあります。

もっと自然との関係をつけるべきです。芽を出して、育って

花が咲き実がなつて死んでいくということは人間も植物と同じだ、というあきらめのような、全体を通して自分を位置づける、そういう意味で、農業をもっとみんながやったらいいと思います。大人たちがどう考えて、どういう仕事をしているかということが子どもを教育するわけですから、まず大人がもっと自然と関係をつけたらいいと思います。ここでみんなが覚悟してちよつとでも変わってこない、と、教育はとてひどいところへいってしまふと思います。目的をもって能動的に生きていけば、日本人の顔つきももっとよくなります。その目的も、観念でなく、行動しなければいけない。教育は文部省がやってくれるなんて思わないで行動しなければいけないんです。

それで、母親というのは大事です。ハン・スーインの書いたもの「毛沢東 The Morning Deluge」(松岡洋子編訳)の中で毛沢東もいっています。父親は人生の競争相手、かつ導き手だが母親はもっと人生の基本的なものを与えてくれた。そういう女性、母親が見られなくなったと思います。母性的なものが非常に失われてきました。そういう意味でばくは、女をちやほやもち上げる意味でなくて女性を大切にしなければいけないと思います。しかしやたらにお化粧ばかりして男をだまそうなどという女ばかりだったら、男性もだ落してしまいます。むず

かしいことです。

物との世界と関係づける。一つの仕事をさばることもそれだけ他の人が困るんだという精神をもてば、その人の精神的なエネルギーは、物質的エネルギーに転化する、物を動かす力になるとハン・スーインの本の中に毛沢東のことばとして出てきます。どこかからのかり物のようなお説教ではないんです。

さつき武市さんたちとも話したことです、感情が不安定なためにそのよりどころとなるような宗教みたいな、われわれの存在の基本になるもの、がほしいわけです。それで絵本……これなんか世界共通なものですね、それが非常に売れているということは、絵本の中に宗教的なものを求めているんじゃないか、価値観、感情、行動の乱雑さのおさまる場所を子どもの絵本の中に求めているんじゃないか、一種の宗教だといっていました。絵本は世界共通です。子どものものでも年とった人でも読みます。ここに何か人類共通のつながりを求めているのではないでしょう。ある神父さんが「今大切なのは信仰よりも「関心だ」といっていることをフロムの本の中で読みましたが、それを（関心ということ）をもっと大きくいえば、宇宙と人間の関係だと思います。生きてきた過去、現在の環境です。そしてわれわれが死ぬ時に子孫に何を残すことができるだろうかという

ことです。中国の繆承志さんたちはよく「子々孫々まで」といいますが、われわれに子々孫々まで残すといえることがあるでしょう。本当にきれいな水と土地と自然と、よい教育を残すということが今のままではできません。これは今の大人たちの責任です。

「信仰」よりも「関心」、まわりにおこっているいろいろなことにどういう関心（感じ考え行動する心）をもって責任をとるか、ということが大切なことです。そういうことで、フロムの最近の本の中で一番印象に残っているのは、「神に救ってもらうというよりも神の心を行なう」ということばです。これを「信仰」にかえたらいいと思います。神様が今この世にいらしたら、これじゃいけないと思うはず。神の心を行なわなければいけないんです。そうすればそこで自分の無力もわかってくるんです。信仰しているから救われるというのじゃなく、救われなくても神の心を行なえばいいんです。そして七〇〇年の年輪や木目のようなものが中にできていたというような子ども、人間を育てていきたいと思えます。そうすればもう死んでもいいと思います。

(一九七三・六・二)

紙 一 重



堀 合 文 子

幼児教育はむずかしい。教育の相手は幼児なので、教師に対して何も文句も抗議もいわない。

それだけに私も現場の教師は、常に学び、修養しなければ幼児にすまない。

幼児のあそびを大切にということは幼児教育者として一つの常識になってしまった。しかし、そのあそびを大切にすることはさまざまで、やり方によっては人から誤解もされるし、ただただ単にあそびを大切に、あそびさせてばかりいればよいと考えられてしまう場合もあり、むずかしい、という声もそこから出てくる。

“あそびを育てる”と一口でいうけれど、その内容は深い。単にあそび、自体を育てるといっても、あそびの中で行なわれる幼児の生活全体を、個人個人のよき所をのびし、

指導すべき所はその機会をとらえて指導するので、朝、一人幼児が来れば、教師と幼児とのそのかわりあいから一挙一動、一言一句指導となって幼児にかえていく。

また、それが一対一の場合も、一対グループの場合もある。

これは日々のこと、個人個人のことで、また組全体のことにもなるので、教師と個人のふれあいであることを考えていると、その間、他の幼児は留守になってしまうのでは困る。

教師の神経と体の動きは大へんであり、大へん大切になつてくる。

また教師にとっては相手が幼児であるがために、教師の一挙一動、一言一句からすべてを吸収してしまうので、二

年後、三年後には、いかに教師と幼児との生活がなされていたかということによって大きな差が生じてしまう。

教育というものはそういうものかもしれないが、日々新で、何年経験したからできる、上手だというものではない。三年前、三歳児を指導した、また今年も三歳児だから、あの時こうしたからやはりあれをやりましょう”は、通用しない。三年の間に世の中もかわり特に現代では急速の進歩、その中で生まれてから育つて来た幼児は三年前の幼児と違うのは当然で、やはりその幼児の生活を見て、観察して、その幼児には今現在、どういうことをしてあげるべきかを考えて、そこに指導が、教育が生まれてくるのが当然であろう。これがゆつくり教師が前もって考えて指導する場合と、瞬間瞬間にその場で教師が幼児の行動、生活をみながらその幼児に適切な教育をつくっていかねばならない場合とがある。

言葉でいえば、こんな堅くるしいことだが、常にこれの連続だ。ただし幼児には世話ということも中に入ってきてなかなか気も心も体も頭も忙しい。三十五人幼児がいれば三十五人分、神経と体をつかうことになる。

こう考えて私は経験の上にあぐら、をかくわけにはいかな

いと思う。もちろん、何年か経験がある人はある安定感はあるだろうが、経験を生かすことはよいが、うっかりすると経験が邪魔をして幼児への適切さをかくことがあるだろう。

しかし、幼児教育者には多方面の知識と能力が無限に必要だ。おおげさのようだが、教育を瞬間瞬間、電光石火のように生み出していく能力だ。

一緒に一堂に会して団体指導をするならば、ある年限の経験はベテランの教師をつくるだろう。が、このように考えていくと経験は何にもならないといっても過言ではないだろう。幼児は常に成長し、幼児側も何の能力をいつ出してくれるかわからないので、それをみのがさず（機会をとらえて）適切な指導をするのだから以上のような能力を教師が常にもっていて、いつでもそれがぱっと出せるだけの用意が大切となってくる。

このような指導は、いつも遊んでいるようで表面にはみえない。一堂に会していると、ああ今歌を歌っていると、今お話しているとか、何か画いているとかわかるが、このような指導はみえないし、常に指導がなされているので、大へんむずかしいことになる。

教師側からいえば、手もぬけるし、また教師の力がたりないと二年後、三年後に幼児の上にしわよせはきてしまう。

外側にみえるような指導はやさしいが、みえない指導はむずかしい。

あそびの中でも指導が大切だということは、一口でいえばこのようなことで、その方法は細かく、緻密で、深く複雑なのでまたの機会にするが、指導が大切ということがわかると、そこで技術のある教師と、ない教師との別れ道になってしまい、遊んでばかりいるとだめだと思うとあそびの幼児の生活を生かしながら表面のみえる所だけを一生懸命指導してしまう。たとえば、生活態度は自由であるが、約束とか、言葉でもってまた教師の威圧で表面にみえる形のみととのえる指導になってしまう。『おはようございます』などなど、心のなにもないあいさつが交されたり、びくびくして神経をびりびりさせたり、毎日生活している中に顔つきもちがってしまったり、自由にやっていますといっても一堂に会してやる一斉と同じ指導、いな、それ以上規制された指導になってしまう場合がある。

外側からみた時、指導されて大へんよいようにみえても、中味のからっぱの子どもが育ってしまい、学習になっても

ちゃんと状況判断し自分のすべきことを自発的にしたりすることができなくなってしまう。

また、子どもをよくみることも必要、考えることも必要、だが考えたり、議論、研究ばかりしていても幼児を指導し育てるわけにはいかない。幼児と『共』に生活し、教師と幼児との間に生じるものを感じたり理解したりすることにより、言葉にあらわせない何ものかがある。それを育てたり、指導したりするのであって、蓄積された学問、技術が、教師自体、具体的に小さくともその教師からにじみ出てくる。したがって、目にみえない、表面に形としてあらわれない指導を大切にするには、教師としてその蓄積を常に新しく勉強しておきないかねばならない。

幼児期には幼児の生活を充分させ、その生活をくずさないで、その中に必らず指導はあり、教師のいいしれぬ、頭の中の動きが緻密に敏感に働いていることが大切である。自由に、幼児の生活、自発性を尊重すると、こんな所に紙一重のむずかしさが存在している。

お互いに放任にならないその紙一重の大切さを理解し、実行できる教師になりたいものだ。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

私の保育

I はじめに

幼児のあそびは、その生活の中のもっとも中核をなすものであるといわれていますが、日々幼児とともにいる私は、幼児があそびに必要なものをつくり、一層あそびを豊かにしているということを、幼児の姿から改めて教えられ、その感をますます深くしております。

ここに、幼児がものをつくるという自己実現の活動が幼児の安定感を満足させ、それとともに集中力が育ち、次の活動へと発展させていった活動を記して、ご指導をうけたいと思います。

私の勤務する花岡幼稚園は、松阪の市街地に隣接し、数年前



長井 洋子

までは九十基にのぼる花岡古墳郡や、江戸時代の国文学者・本居宣長の奥つきを遠くにのぞみ、田園風景の美しさを満足させてくれたのに、今では、地域開発の波で新しい住宅地域となり、夏休み前までは雑草が繁茂していたのにまたたくまに赤土で埋め立てられ、その土には青や赤と、色とりどりのイラカが建ち並び、青空まで切り取っていています。

貧しい市財政の中で、幼稚園行政もかけごえとはうらはらに真正面からそのあおりをうけ、市街地域、住宅地域などは五歳児一年保育しか実現されていない現状なのです。

一年という保育期間を考えたとき、その前半は、対象を何かにみたててあそぶ、いわゆるごっこが一つの大きな活動の山をなしていますが、運動会を境に後半に入ると、ごっこそのもの

がだんだんとほんものらしさを求めてきて、模倣という活動が多くみられ、同時に役割の分化もはつきりと表われてきます。このころには、あそびに使うものをつくるということもしたいにうまくなり、実在化の方向へむかっていることが幼児の活動として記録されています。

幼稚園における指導とは、幼児の活動の発達としては握する必要があるといわれていますが、ここに、虫かごづくりの活動の中で、そのことを改めて考えてみようと思いました。

Ⅱ 夏休みがすんで

九月に入り、長い休み明けでT男T夫U子たちの退行現象が気になるが、他の幼児たちは三、四人の好きな友だち同志で、簡単なルールのあるゲームなどをたのしむようになってきた。一方まだごっこの活動も少なくないようである。ごっこの中であそびにつかうものをつくるのが盛んになってきたが、一学期のそれにくらべ、幼児のつくりたいもののイメージがいつもはつきりし、ほんものらしい型を求めてきて、身近にある既成のものを利用する（たとえば、菓子箱へ虫を入れる）ことは満足しなくなってきた。しかし、幼児自身があそびに使うものをつくりたいという要求を満足させるには、まだ幼児の

頭の中で形や作る上での手順などが十分うかべにくく、作る上でこまっている場面も多いといった状態である。

このころには、例年みられる虫とりの活動が今年も予想されるので、

全紙の1倍大きな白ボールに虫かごの展開の一部を印刷しておいた。（図1）なぜ印刷したかというと、六月ごろの箱づくりの活動では、折紙の延長した活動であったのが、ここでは一枚の紙から立体化への手順や、展開図をみることによって完成した虫かごが頭の中にうかべやすいようにと配慮した。

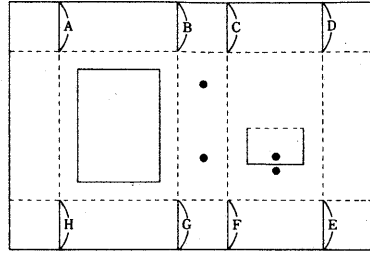
○ 作業の手順を誤ると虫が入れられないので、教師ができるだけ親切に教えるようにした。

○ 早く作りあげたいという幼児の要求をくみとり、接着力が高く、接着時間が短い、木工用ボンド・ビニールノリ等用意した。

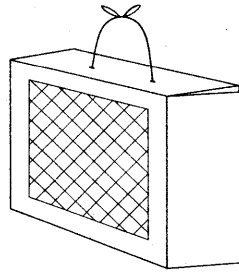
○ あそびの中で使用できる本ものらしいものにしたいとねがい、白ボールというはじめての材質を用意した。

○ 厚い紙だから、折り線をつけてきちんと曲げることを経験させたい。

○ その他、ビニール製金網・輪ゴム・足長ピン・紐など。



実線部分を延長することを子供にさせる
A~Hまでも切りこむ 図1



図II

Ⅲ 虫かごづくり

九月八日

(1) 朝の出会い 八・三〇〜八・四〇

「今日 朝の六時にお父さんとガモ取りにいったんや」

家の近くに残っているくぬぎ林へ、父親と自転車にのって虫とりに行ってきたとほこらしげに友だちにガモをみせ語りかけながら門をくぐってきたY生。

門のところで出会ったU治、M男は、いかにもうらやましうにみている。

「あとで ぼくにもかしてな」

と小首をかたむけて頼んでいるU治。

今日も暑くなりそうな空模様なので、水あそび場（幼児たちは足のプールとよんでいる）の砂を掃いたり、足ふき用の雑きんの用意をしたりしながら、彼らのやりとりを眺め、幼児を迎える。教師の姿をみつけたU治はさっそく

「先生先生、Y生君、ガモつかまえてきた!!」

と、ビッグニュースを伝えてくれるとともに、

「ぼくは 櫛田のおにいちゃんに三匹よりようけつかまえてもろてかごへ入れとったんやけどな、もう死んでしもたんよ」

と悲しそうに泣くまねをする。教師はU治の気持ちをだいに受け止めたいので

「そうやったの……」

と言葉すくなの返事をしながらも悲しそうな表情をする。

(2) 虫とりがはじまる 八・四〇〜九・〇〇

雑草の茂った園庭は幼児にとって絶好の虫取り場である。K男などは、チャリ（ざりがにをこのようにしか発音できない）

のおっかけから、小虫とりに懸命である。バッタ、ギジギジと右手にも左手にも虫をにぎり、教師に見せてくれる。彼はしばしばそれをにぎりつぶしてしまうこともあるが、ともかく『虫とりの博士や』と友だちからも認められ喜々としている。他の活動では友だちに及びもつかないほどの遅れをもっている彼だけに、担任としても全くうれしい光景である。K男のあとについて虫とりにしていたN夫も、左右の手に小虫をつまんでいたが、手の自由がきかなくなつて、ビニールの袋を探してきてそれに入れ、ようやくほつとして袋ごしにじつと眺めている。

N男の袋をみていたS哉は、

「ビニールの袋は息できやへん、死んでいくぞ」

と自分の鼻をつまんでみせる。教師が、

「息できやんの？」

と不思議そうにききなるとS哉は、

「そうさ、ホタルでも死んだんやもん。網へ入れたらんとかわいそうやよ」

という答。単純に何もかも「かわいそう」ということばで処理していくことには少々疑問を感じながらも、ここ数日来、虫かごづくりを活動に入れたいと考えていた矢先だけに、この機会にと用意しておいた白ボールを、N夫たちのそばのテーブル

へもつてきて教師は黙って作業を始める。

(3) 虫かごをつくりはじめる 九・〇〇〜一〇・三〇

S哉「あれ 何かいてあるの？」

けげんそうな顔。教師は、

「何ができるのかな？」

とかつてにしゃべりながら、まず一、二本の延長線を入れ、メウチで線上に折線をつける。

次にカッターで網を張る部分、ドアの部分の切りこみを入れる。一人二人と教師のまわりにあつまつてきては、

「何ができるの？ 何になるのかなあ……」

と教師のしぐさをじつと眺めている。教師はそれから窓へ用意しておいた網（ビニール製）をビニールのりをつかつてはつてみる。つりさげ用の紐を穴に通して結ぶ。ドアのかぎとして足長ピンと輪ゴムを利用。最後に立体にし、木工用ボンドで接着する。（図2）教師が網をはったところには、S哉たちは口々に、

「あつ 虫かごや……」

と大よろこび。T也たちも、

「ぼくのものつくつて」「ぼくにもちようだい」

とだんだんと声が大きくなってくる。そこで教師は、

「先生はひとりでそんなにたくさん作れないから いっしょにつくらない……」と誘う

「うん つくろ つくろ 紙ちょうだい」

と大はりきりとなる。

用具の準備物を少なめに（ものさし四本、メウチ二本、大きいウシヤばさみも添える）しておいたので、六名の幼児がすぐ活動に入れなかったがお互いの仕事をみながら順番を待ち合う姿が見られほつとする。

S 哉はさつそく線を延長する作業にとりかかる。カメンライダーのうたがとび出しはじめたが実線に物差しをあわせ鉛筆を手にもつと、合わせたはずの物差しは線からぐいと動いてしまふ。二度三度とものさしを合わせるのだがむずかしい。左右の協応動作がうまくいかない。教師はそつとS哉のうしろへまわつて、線に物差しがあつたとき、彼の左指のうえをおさえてあげる。

S 哉はほつとしたような表情をちらつと見せ、そろそろと鉛筆をはしらせる。ようやく一本の線がひけると「でけた」と叫び、ほつとしたのか手を休めてしまふ。

その間にU治は、さつと物差しを借り、八本の延長線をいっ

きに引き、

「先生できたよ」

と汗いっぱいの顔に満足そうなひとみをかがやかせて教師にそれを見せてくれる。教師がまだ線引きのできていないところに気づかせてあげると、今度は容易にできる。手早くできたU治には、他の幼児がメウチで折線をつけているので、教師は網をはる部分、ドアの部分のカッターで切りこみを入れてあげる。U治は得意そうな表情で「こんなの簡単や」と意気込む。U治は友だちが使っていたメウチをかり折線をつけたあとで切り込み箇所へハサミを入れる。ビニール製網の接着、ドアのかぎをつけるとT也は、さつと「サインペン」をもつてきて、

「二丁けん銃のおまわりさんやぞー。おまわりさん二人が、みはつとるよつて虫がとびだしたら、バーバーンや」

ひとりごとをしゃべりながらドアの左右に二人のおまわりさんを描く。示した箇所にメウチであなをあげ、ひもを通して結ぶ。

このように完成をよろこんだ幼児がいた反面、虫がとも入らない虫かごになった幼児もいた。

あとから活動をはじめたM子は切りこみ箇所にみようみまねではさみを入れ、四センチくらい長く切り込んでしまい、S哉

から、

「あつ、Mちゃんようけ切ったやんか……」

と指摘され、

「先生 ようけ切ってしもた」

と半べソ顔である。教師はすぐに、

「切りすぎたようだけど、裏からこの紙をはれば大丈夫よ」

とはる紙を切つて渡す、M子は、「こっくり」とうなずき安心したようすで再び作業をつづける。

H夫は、紙を折りまげる際に、うまくまがらないと、口をこわばらせて折りまげようと懸命にとり組んでいるが、友だちのようにうまくまがらないことに気づき、

「先生、ぼくのかみはかたいでまげれん、U治君のようなええ紙ちょうだい」

「H夫君、先生、U治ちゃんと同じ紙をあげたんやけど――」

H夫君 まげたいところをもう一かい（メウチで線をたどりながら）すじをつけて、こうしてまげるとまげやすくなるのよ」

とH夫の前で実際に示してあげると、

「あつ、ほんとや ぼくする。」

と今までだったら、先生 だけへん やつて」と頼っていたのに、自分でやろうという意欲がでてきたことを教師もよろ

こび、いっそう励ましてあげたのに、最後に教師の気づかぬところで接着剤をつかわずセロテープではりあわしてはった。

また、のりづけの段階では、セロテープの接着で虫の足がひつかかり、ちぎれてしまったという過去の失敗から、教師はセロテープをつかわずにのりづけをするようにY生にも誘導した。ビニール製の網の接着には、ゴム製ののりを用意したが、接着剤を紙にのばしたあと、皮膜ができてから接着する方が効果的なのだが、のりをのばしてしばらくおく……ということがまだまだむずかかった。

なお、最後の側面を接着するところでは、木工用ボンドを利用したが、普通の糊よりも接着力、接着時間が短いことなどは、幼児の活動を容易にしたように思われた。

(4) 虫かごをもって再び虫とりに 一〇・三〇―一一・〇〇

Y生の指についてる接着剤がまだ乾かないうちにもう、かごの中ではバッタがつつつきあい始めている。ポケットにでも入っていたのだろうか？ 真剣な顔をして、持つところの紐を結んでいるY生をみると、聞くのをためらう。

早くできあがって外にとび出していたU治が保育室へ戻ってくる。みると、ビニール網がのびきってバッタの足が飛び出し

てきている。

「先生、大変だ大変だ」と大声。

さっさと、コーナのテープを使つての応急手当が始る。

M子は、できあがつた虫かごを後生大事に持つて、網に自分の鼻をくつつけて、中をジツとのぞいてみたりして、虫かごがつくれたことに満足している表情、友だちに見せたりして喜んでいる。

「M子ちゃん、どんな虫が入っているの?」

との教師の間かけに

「なんにも入ってへんよ、留守ですよ」

と平然としている。

M也はまた

「先生、兄ちゃんのもないと喧嘩するで、もう一つ作るワナ。紙、オクンナナ(下さいの意味)」

といつて再び、作り始める。M也は手順がわかつたので、こんどは自分ひとりでできることがうれしらしい。

このようにあげていくと、ひとりひとりの組の幼児たちのそれぞれ違つた表情、そして共通している生き生きしたようすが記したくなる。虫を出したり入れているので破れてきて、それでも、その上をビニールテープで修繕しては、また外へとび出

していく幼児の姿に、私は、なんとも表現のできない満足感にひたつてしまつた。

(5) 童話を聞いてから降園のしたくをする 一一・〇〇

一一・三〇 以下略

III おわりに

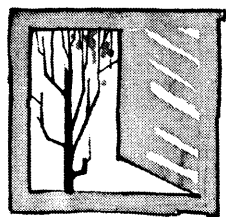
このような実践の中で私が学んだことは、幼児が自分のあそびに必要なから作りたいという要求をもち、保育者がその要求が実現できるように用意をしてあげれば、熱中した活動になり、幼児なりに仕事のみとおしをもつことができるということである。今の幼児には遊びのふかまりがないということを耳にします。が、幼児の側に発言を求めれば、きっと幼児たちは、こういうかもしれません。

「ぼくたちのやりたいこと、もつとやらせて」と。

(松阪市立花岡幼稚園)

保育実践の試み

時代の流れと幼児の社会性



加藤 定夫

1

現代における個人のパーソナリティの特質として、D・リー

スマンは「他人指向型」と名付け行動決定の際、自己の内面で、^{注1}動機の葛藤を生じて自己裁定することなしに、マス・コミ、マス・プロを中心とする現代の情報網の中に行動決定のよりどころを求めているとしているのである。さらに、もう一步進めて考えてみるならば、個人の行為そのものの源になる動機付けそのものが、内面的に誘発されるのではなく、これもまた、マス・コミによって外側から誘発されるのである。

たとえば、連休があると家族そろって旅行に行かなければ、

時代に残されるような感覚をもったり、デパートでも、生活の必需品を買うのではなく、イメージを買ってくることもよくあろう。

このようなことは、現代人が、他人の意見や行動や目標などをリーダーのように敏感にとらえて適応し、その代り、自己の内部の一貫性を放棄しているといえよう。さらに人間関係の面でも、最近では、アパートやマンションに住んでいた場合、隣人が一ヵ月以上も姿を見せなくても気にせず、半ば白骨になっていたというような事件も起こっているのである。

このように、地域社会の中で大人同志の人間関係が疎遠になっており、自己の行動に確信をもっていない時に、自分の子ど

ものをロッカーに入れるということまでいかににしても、教師、保育者、大人の中に潜在的に問題を蓄積しているといえるのである。そして、養育者は、わが子を育てるための知識をテレビ、雑誌に頼りきっているのが現実であろう。

このような社会状況の中で、幼児教育という立場で、幼児の社会性を指導するということは、いかなる意味をもつのであろうか。

過去の日本における幼児教育の歴史をみると、社会性の指導という点では、常に友だちと仲良く、協力して楽しい生活や遊びができるよう指導されてきたのである。そこには歴史的感覚のない横断面的な指導がされてきたといえよう。しかし、特に最近、幼児期、児童期と親孝行で、学校でも、近所でも評判のよい子が、青年期になって豹変する例も目立ってきていることは一体何が原因しているのであろうか。その原因の一つに幼児期の教育があるといわれているが、一体それは何であろうか。その原因として考えられるのは、幼児期から児童期を通して、社会生活のわく組が多様化しすぎ、「他人指向型」の思考方法が身についていくからではないかと考えるのである。

2

そこで、現在行なわれている幼児教育の中で、西欧と、日本との社会性の育成での面での方法論を概略的に検討してみたい。これまで、日本における幼児教育は、日本的価値観となっている集合主義的、伝統主義的態度の育成にある。これを教育の場面で考えると、その集団の安定のために、個人の自立性、自律性、協調性などを育成し、集団の和が保たれて始めて、個人の幸福がもたらされると考えるのである。たとえば、幼稚園、保育園における一斉保育、行事の重視の中に、それが示されているといえよう。これは保育者が集団の安定という尺度から個人をみるということに起因しているからである。これに対して、西欧的人間観の根本にあるものは、個人主義的態度の育成にある。この西欧的人間観にあるものは、個人が幸福になって始めて集団全体がよくなるという考え方である。

これは、ルソーの社会契約論的考え方にみられる通りである。また、ヨーロッパにおけるモンテッソーリ教育法の重視、あるいは少人数制による個別的指導法の重視などに見られる通りである。それは個人の安定という尺度から集団をとらえるのである。

これらは社会性の実際的な指導の面にも違いとして表われてくるのである。日本の大勢の幼稚園の場合、まず、入園頭初に

おける指導として、幼稚園生活に必要な約束をいろいろと教えられる。そして、この約束を守ることが、いかに楽しく幼稚園生活を過ごせるかを教えられるのである。これが、幼稚園生活を楽しく過ごさせるための指導という形で表われるのである。さらに、これらの約束を守れなかった場合には叱られ、時には他の子にも悪い行為としてみせつけられるのである。反面、集団の約束を守り、献身的に集団の和を保とうとする子はほめられるといった具合にひとつの型にはめられていく傾向があるのである。

しかし、西欧においては、G・マフィーが述べているように、^{注2}幼稚園生活の頭初において、まず保育者の役割としては、幼児に対して集団の約束を教えることではなく、幼稚園という集団がいかに自由であるかを話し、示して、自由に振舞うことを勇気づけ、彼等が興味をもつ範囲を広げようと努力することであるとしている。次の段階として、幼児は新しい段階としての世界の中で、いろいろな未経験な現象にぶつかり、互いに衝突し、助け合うことを自らの体験として学ぶのである。そこには子どもたち自身による問題の発見と集団のもつ意味を考えさせるのである。さらに次の段階として彼等は人間関係の中で、急速に洞察力を修得するのである。そして自分の洞察力に対して、

くり返しを経験を通して、自分自身で評価し、集団のもつ意味を自分の次元で理解し、社会性の紐を形成していくのである。

このように、日本と西欧においては教育観が異なっており、当然そこから受ける影響のされ方も違ってこよう。それに、日本の社会のように情報化がますます密になってきている状態では、画一的思考作用により一見自由な社会の中に、個人の主体性が埋没してしまう傾向が、ますます強くなってきているといえよう。

そこで、現代において、幼児の社会性を培うという場合は、個人の主体性の確立としてまず、動機付けられた社会的行為が、行為として遂行される以前に、自己の内部で葛藤し、自分自身で決定を下すという指導が行なわれなければならない。さらに行為における自己裁決の機会をより多くもたせるという経験を意図しなければならぬであろう。ここに個人の主体性の確立があり、それゆえに、保育者が「仲良くしましょう」とか「人に親切にしましょう」という言葉をくり返し強制しても効果があがないという論拠がある。

3

これらの意味での社会性の育成のひとつの試みとして、萩中

教育研究所の幼稚園課程、年中組、年長組に対して行なわれた実験がある。すなわち、彼らは、一日のうちに課題がひとつ与えられ、その課題は一日のうちでいつ行なってもよく、登園後すぐに行なう子や降園時間直前になって着手する子などおり、なかには、その日では完成せず、次の日まで持ちこす子もいた。

この課題は、教師の意図を中心として指導し、興味を新しい範囲に広げようとする試みでもあった。その他は、自由活動が主体で、これは、子どもの主体的な遊びの中で、個別的な指導を行なっていたのである。さらに自由活動の領域を広げた。

すなわち、お弁当もいつ食べてもよく、また園のどの場所に行つて食べてもよいことにした。そこでの保育者の役割は、幼児各々が興味をもつような環境設定と、活動に対する動機付けを行なうのである。

このような活動状況の中から、子どもたちの動きをみると、一日目は、課題を降園間近になってあわてて行なう子が目立つており、積極的な子が絵を画けば、それを真似し、一人の子がお弁当を食べはじめると、たとえ十時ころでもお弁当を食べるといった具合に、個々の主体的活動はほとんど見られなかった。

しかし、この実験（一週間に一回）を数回くり返していくことによって、集団の動きに自分の行動を合せるのではなく、少

ずつ個々人の主体的行動が目立ち、同じ時間帯における遊びの量が、最初は一つか二つであったのが、十種類にもふえた。

さらに彼らの行動も、最初は、ものめずらしからお弁当を園のすみの誰もいない場所に行つて食べてみたりするグループもあったが、誰から怒られることもなく、結局、教室の中で食べたり、木の下で食べたり、落ち着いてくるようになった。また、集団の中における新しい規範、または集団性を高めるものとしての、いわゆるお当番に相当する仕事の役割分担が出てくることも示された。

これらのことから、幼児集団の中での規範は、保育者が、外からの強制的ななく組として与えられる場合には、幼児の活動欲求を阻害することが多く、その規範に対して納得することが少ないことが実験の中で見られたのである。反面、幼児が自分たちで作出した規範は彼等のレベルで納得しているため、その規範を破ることが少ないのである。すなわち、保育者の作り出したモラル（規範）はモラル（志気）を減退させるが、幼児自身の作り出したモラルはモラルを高めるといことが示されたのである。

これらのことは、集団のダイナミックな相互関係の中から新しい小集団の発生、または集団の組織性などの発展という集団の機能と主体性が、自己の所属集団の中で、どのように位置付けられるかを理解していくようにしなければならないし、役割—期待の分割での役割葛藤。役割一致の発展という通路を通して集団としての社会的役割、社会規範という機能を認識していくのである。これは言い代えるなら社会行動における動機という主観的範ちゅうを、できるだけ自己裁決できるような機会を多く与えることによって、社会の機能という客観的範ちゅうに組み代えていく過程であるといえよう。

結局、この実験から、幼児は仲間から行動の選択を迫られた場合、自己のすべての能力をフル回転して判断を下し、全力で物事に集中しており、幼児教育の中で非常に重要な要素であり、かつ最も現代人に欠けている面に対する指導が、幼児教育の中で、ある程度可能であることを示しているのではないだろうか。

（秋中教育研究所）

注1……D・リースマン「孤独な群衆」加藤秀俊訳

彼は、封建社会のように階級のわく組が明確な社会では、伝統、慣習を守っていくことが特徴であるとし、これを「伝統指向型」と呼び、近代社会のように、自分自身で行動決定をしなければならない社会のパーソナリティー特性として「内部指向型」と名付け、「他人指向型」の現代と区別するのである。

注2……G. Murphy『The Process of Creative thinking、

Educational Leadership (14) 1956 p p 11—15

訂正

八月号54ページ、「母のめざまし」の第一節

「びちりとめざめる」は、

「び・たりとめざめる」の誤りです。

著者および読者におわび申し上げます。

日本ザル幼児の

保育ノートから

(つづき)

浅見千鶴子

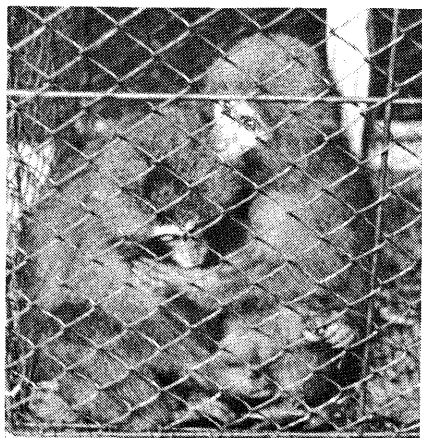


写真 1

指しゃぶり

指しゃぶりをする子どもは人工哺育で哺乳ビンで育てられたものが多いといわれるが、サルの赤ん坊でもそのように、自然の中で母親の乳をのんで育った幼児ザルにはほとんど指しゃぶりが現われないが、母親から離して哺乳ビンで育てると大ていの赤ん坊ザルは指をしゃぶり出す。哺乳ビンは自然の母親の乳首に比べてミルクの出がずつとよいために、ふつうなら長い時間かかって、必要量の乳をとるのに、哺乳ビンでは短い時間でのみ切ってしまう。吸う活動自体が赤ん坊にとって快い体験を与える活動なので、満腹でも吸いたい要求が強く、乳首の代りに指を吸うようになるのだと説明されている。自然の母子関係を見ると、生まれてしばらくの間はほとんど赤ん坊は母親の胸に抱かれきりで、乳が出ていても、出なくても、大てい赤ん坊は乳首に吸いついているようである。人工哺乳では自分の指がまさに母親の乳首の代理なのである。吸う指は前肢の指ばかりでなく、後肢の指であることも多い。そして拇指のほかに二指、三指のこともあるが、これは少ない。大てい指を吸いながら眠る。強い習性がついてしまうと、退屈な

とき、不安なとき、あるいは眠くなるときはいつでもチューチュー指をばげしく吸う。そして、この癖がつくと、吸われる指の先が白くふやけてしまうほどである。二歳ぐらゐまでこの指しゃぶりは顕著に続くが、それ以後はいつの間にか消えてしまうようである。

私の育てたサルの子の中には指しゃぶりはしないが、自分の腕を吸ったり、相手の耳をしゃぶったりするものがあった。これはイク子とフク子という二頭を一緒にして育てた対飼育によるものだったが、念の入ったことに、眠くなるとお互いに抱き合つて、イク子はフク子の耳をしゃぶり、自分の指をフク子の口に入れ、しゃぶらせながら眠るのだった。(写真1)

表出行動——声と表情

私は前年、サルの赤ん坊のうぶ声をきいた。ある真夏の昼、大学の屋上の実験室で仕事をしていると急にけたたましい「ギャツ、ギャツ、ギャツ……」と大きなばげしい泣き声が出た。けんかでもしたのだらうかととび出してみると、出産があつたばかりで、小さな黒い毛の赤ん坊ザルが血液のたまりの中にひっくり返つて手足をバタバタさせ泣

き叫んでいて、そばに母親になつたオトメが立っていた。これがサルのうぶ声であつた。その後も赤ん坊は抱きついていた母親の体からはがされる度に、このような激しい泣き声をあげた。母の胸に抱きつくと途端に静かになる。オトメは生後一カ月ごろから私が育てたメスザルで、このとき初めて五歳で出産したのであつた。母親のないサルは、初めての自分の子どもを育てられないとハローはいっているが、オトメはどうやら育てることは育てたが、最初の日から、すがりつく子どもを無理にはがして泣き叫ぶのに離れて眺めたり、背をのばして乳を吸わせない姿勢をしたり、いわゆる育児拒否的行動をよくとつた。その度に赤ん坊はギャー、ギャー、泣き立てた。夕方、実験室にいるとよくけたたましい泣き声をきき、出てみると大いオトメが赤ん坊を泣かせているのだった。しかし私たちが近づくとそれまで放して泣かせていたのにす早く赤ん坊を抱き上げて、向う側へ逃げていく、このようにして育つた子どもはかなりの強い性格のサルになつていった。

おどろいたときや、何かちよつと気にいらなときはキツ、キツと短い鋭い声を出す。同時に体をバネ仕掛のようにピクピクとはねるように動かす。生まれた日から母

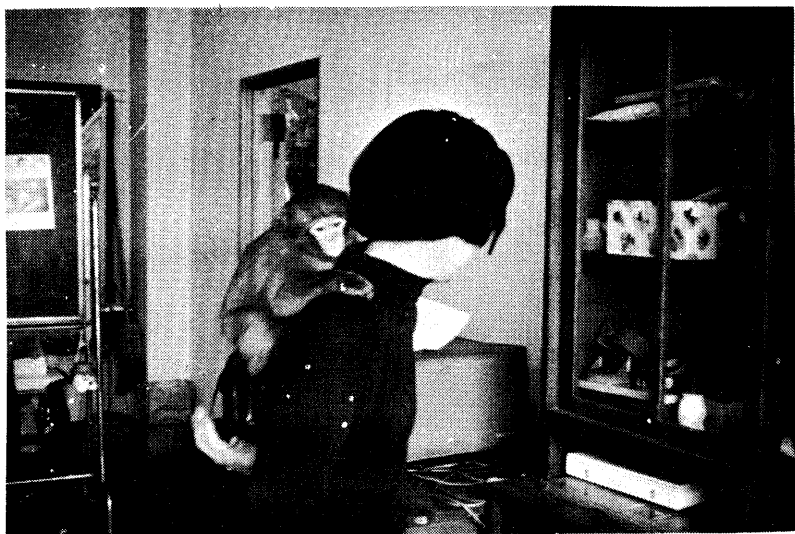


写真 2 甘え

ザルの胸の中で赤ん坊はキッキツとのけぞるように上半身をはねさせてむずかっていた。一種の怒りの表出のようである。不安なときや、空腹のときはかん高く、「キヤーツ、キヤーツ」と大声で泣き立てる。私はサルの赤ん坊をモンキーセンターからつれてきてしばらくの間、哺乳のために毎日バスケットに入れて大学と家とを往復したが、ときどき電車の中でキヤーツ、キヤーツと泣き立てられて閉口した。

目覚めていて機嫌のよいときはピューといった声やクルルという声を出す。満足の表出らしい。何か興味を感じるとやわらかなエツ、エツという声をあげて近よってくる。名前を呼んでやるとやはりエツという声で返事をする。長い間ひとりぼっちに放っておかれた後、そばにいつて愛撫してやるとグッ、グッ、グッとさもたまらなかったように鼻をならしてよろこびを示す。こんなときケージから出して抱いてやると、胸に顔を埋めて、しばらくの間感きわまったような声を出して体をこすりつけてくるのが常である。親しいものが見当たらなかつたりするとホーという高い澄んだ声を出す。小さな口を円くつぼめてなく、哀愁にみちた声である。母親がいなくて淋しいときにホー、ホー、と

泣いて呼ぶのだが、いかにも悲しそうな顔つきである。

ケージから出して自由に遊ばせた後、またケージに戻そうとつかまえて入れるとき、いやがって抵抗し、ギャー、ギャー泣き声をあげる。このギャーッギャーッという泣き声は成長するにつれてますますひどくなり、自分の要求を通す手段に使うようになった。オトメは好きな食物などほしいものがあるのになかなかもらえないと、急にギャーッと泣き出す。こちらはあわててはしがるものを与えてしまう。手に入れた途端にケロッと泣きやむ。一種のおどかしの手段となった。

サル表情には怒りや恐れははっきりあらわれるが、よろこびや悲しみは人間のように分化していない。しかし、声の出し方、泣き方によってはっきり知ることができる。笑い声もヒトに特有のようで、チンパンジーなどはくすぐるとハッ、ハッ、ハッと、笑い声に似た呼吸音を示すが、日本ザルではくすぐったがるが、それはキッ、キッ、キッという悲鳴になる。怒ったときの表情は独特である。ひたいの毛がスーと後にたなびき、眼をカッと開いてにらみさえ、口を前につき出し、くちびるを平たくして、グワッ、グワッといった怒声をあげる。相手を威嚇するときは眼を

いからし、口を大きく開ける。こうすると奥にある犬歯

(牙) が示される。相手が弱いとこんな表情を示されるだいて一ぺんに恐れて恭順の態度をとることになる。恐れ表情もサル世界には大切である。鼻柱にしわをよせくちびるを大きく開き歯をむき出し、ギッ、ギッとかがギャー、ギャーとかけたたましい泣き声をあげ、多くの場合顔を相手に向けながらうずくまる姿勢をとる。けんかをして負けるとよくこのような表情と姿勢をして、降参の印とする。

群のリーダーはつねにしっぱをピンとあげてあたりをへいげいし、とり締り行動をとっている。しっぱを上げているか下げているかで、そのサルの優位度の表示となる。自分より強い相手の前に出ると大たいしっぱを下げてしまう。このように群生活の中では、上げられたしっぱが力とか優位性のシンボルになっている。幼い私のサルたちはこのような群のルールは知らないのであるが、怒ったとき、威嚇するときはいつでもしっぱをピンとあげた。彼らを初めて、屋上の大きなサルたちを飼っているケージの前に連れていったとき、こわいもの知らずで、小さな彼がしっぱをピンとあげてうなり声をあげながら猛然と大きいサルに向かって攻撃しかけていった。もともと、格子を隔てた対面であ



写真 3 仲間遊び

り、それがなければ、一たまりもなくやられてしまうところであつたろう。一般に動物は、こわがるものに対しては本能的に攻撃行動が誘発されるものである。しっぽを立てて、独特の威嚇の表情をして、猛然と向かってくるときは幼いサルでもなかなかのすご味があり、気の弱い女子学生が、こんな彼におどかされて逃げまわつたものだった。

遊び行動

イヌもネコも幼い間はよく遊ぶ。しかし、おとなになるとほとんど遊び行動は見られなくなる。その点サルも同じである。おとなのサルは群の中では食べたり、眠ったり、けんかしたりする他はグルーミングをし合うくらいで遊ぶような行動は全く見られない。しかし、子どもたちは実によく遊ぶ。ひとりでも、木によじのぼり、木の枝をゆすつて枝から枝へとび渡り、また地面に下りて、何か見つけると拾つて口に入れる。出したり入れたり繰返す。また軟かいものは引きさいたり、ころがしたり、こねたりする。少し大きくなり、二ヵ月ごろから仲間遊びが盛になる。数匹の赤ん坊が集まってめいめい勝手に木の枝によじのぼったり、下りたり、走りまわっている単純な形から、しだい

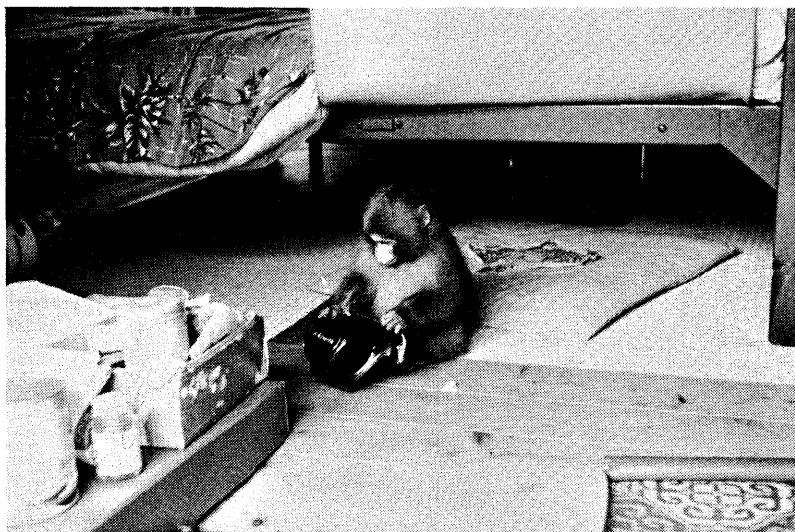


写真 4 ひとり遊び

に手荒なとっ組み合いをするようになり組んづぼぐれつ、追いかけ合い、逃げ合いをやって過ごすようになる。このような闘争ごっこを通して子ザル間のお互いの力量がわかってきて順位がきまってくるのだといわれる。

保育の間に観察される遊びは環境が限られているために、自然におけるような多彩さは見られない。しかし、初めころは赤ん坊にとって何でも遊びになりうるのであって、私たちもいろいろな遊びの形を見いだすことができた。サルの子どもの遊びの形を分けると、手でいじくる遊び (manipulation) 口でやる遊び (mouthing)——しゃぶったり、なめたり、かんだり——、および運動遊び——とんだりはねたり、上ったりおりたりとっ組合ったり——の三つに分類できる。もちろんその二つないし三つが重複していたり、連続したりすることもある。また、遊ぶ主体がひとりであるひとり遊びと、相手がある仲間遊びというように分けることもできる。ひとり遊びは早い時期に多く見られそばにいるものに無関心で、自分の気のむくままに勝手なことを次から次へとやって遊んでいる。生まれて一ヶ月も経つと自然に赤ん坊たちが大勢集まるようになるが、やっていることは自分の気のむくままの行動で、ヒトの子ども

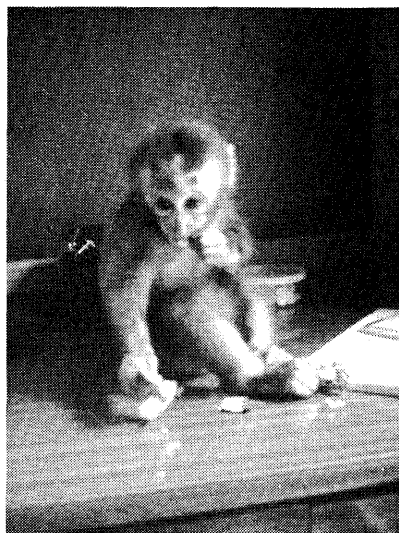


写真 6



写真 5

の並行遊びの時期に似ている。二ヵ月ごろからお互いの連絡や呼応の下に活潑な遊び活動が展開される。追いかかけたり、とっ組み合ったり縦横無尽の活動である。仲間が与えられないとひとり遊びが長く続く。そしてかなりはげしい運動を伴う遊びになる。

手でいじくる遊びとしては、対象をさわったりころがしたり、こねまわしたり破ったりというような行動パターンがある。硬いものは形が変わることはないが、軟いもの、もろいものはさらに口の運動が加わると目茶々にこわされたり、破かれたりしてしまう。珍らしいものはまず手で触れてみて、安全であることがわかると鼻をもっていつてかいでみてから拾って口に入れる。大きくて口に入らないとしゃぶったり、なめたりという行動になる。口に入られると軟いものはたちまちにかみくだかれる。硬い石ころなどは口に入れたり、出してみたり、ほお袋に入れたりしばらく大事そうに扱われるが、そのうちにあきると捨てられ見向きもされなくなる。紙や布は手と口で、またたく間にひきさかれ、口の中に入れられてクチャクチャにかみくだかれる。幼い子どもがチューインガムを薬しむようにときどき口から引き出して眺めてまた口の中に入れる。



写真 8 モンジロースタイル

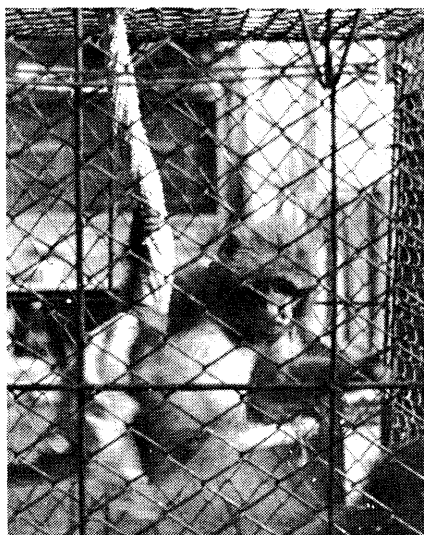


写真 7 タオルで遊ぶ

抱きついて安定感を与えるためのものとして、ケージの天井にタオルを吊り下げてやると、それは住人たちのよい遊びの道具にもなる。それを片手で持ってメリーゴーランドのように回って遊んだり、頭に被ってみたり、もとのところを口でくわえて、手足を放してバタバタさせたり、個体によってそれぞれ好きな遊び方をした。彼らはやってみておもしろいと感じると、繰返して遊ぶのである。フク子は輪ゴムをもらうと、それを両手で捻じて頭からくぐって遊んだ、イク子はスプーンを手に入れると柄の方をくわえて、体の方を手でピンピンはねて音を出してよろこんでいた。アズサは楊子のような細長い小枝状のものが好きで、それを口にくわえながらとびまわった。それを見て私たちはモンジロースタイルとはやしたものである。

こんなに若い間はよく遊ぶのに、大体三歳を過ぎると遊び行動はあらわれない。お互いの間にちよつとしたいさかや闘争はよくあるが、そうでないときはねそべっているかグルーミングに余念がない。遊びを卒業して彼等には生きるための厳しい試練が待っているのである。

(お茶の水女子大学)

読書のすすめ

文庫本のこと

外山滋比古

目は本を読むためにについているのか、ということを考えることもある。あまり、世間で本だ、読書だと目の色を変えるから、本を読んでバカになったのではないかという人間の顔を思い浮かべて、ひとりニヤリニヤリしながら、ぼんやり時を過ごす。要するに、読書がそれほど好きではないのだ。人に読書をすすめる資格はない。

いつも読書の腹加減はすいている。げーとするほど本をつめこんではない。気に入ったものがあれば、じつにおいしく読む。ほかの本など相手にしないで、そればかりつき合つて、はなはだ心ゆく思いをする。

あとの腹具合を考えてみるに、古典と言われるようなものがさすがにいちばんもちがよい。ベストセラーはあとで妙なゲップが出たりする。

古典といつても別に大げさに考えることはない。当世はどこにも安本でころがつている。夜の散歩に、小銭ぜにをもつてふらりと町へ出て、本屋へ入れば、ずらりと文庫本がならんでいる。バカな書店が文庫本を商売の仇にして虐待したこともあるが、このごろは売行きがよいから、どこでも一等席に並んでいる。これすな

わち、一大古典双書である。かけそばいっぱい値段でりっぱな古典をポケットに入れて帰ることができる。生けるしるしあり……。

文庫本で注意したいのは翻訳もので、これは店頭で何ページかはかならず本文を読んでみる。日本語でない日本語で訳してあるものが、まあ、さういうものなら、読まない方がどれほど身のためか知れない。翻訳の古典は数えるほどしかない。

ことは、新しく文庫に進出する出版社もあって、文庫競争になるという。競争がはげしくなれば読者へのサービスの悪くなることはない。見どりよりどり文庫本を読む時代が来たようだ。

(お茶の水女子大学)

人間の形成

—人格心理学のための基礎的考察

G・オルポート著
豊沢登訳
(理想社)

南 信 子

オルポートは、世界的に著名な心理学者であり、特にパーソナリティに関する論文、著書が多い。この書には、人格心理学のための基礎的考察という副題がついているが、博士のこれまでのパーソナリティ研究の精髓を、平明に要約し、今後の人格心理学の研究の方向を指示しているように思われる。オルポートの、その論旨の明快さ、論述の周到さ、視

野の広さは、学界の定評となっているようである。

オルポートは、自然科学的心理学の風潮に対して、人間の人格の立場をあきらかにしようとしている。生きた人間を、全体的包括的に、またあるがままにとらえようとし、その人格の生成の過程について透徹した考察を与えている。この書の、プロフィール論(十一節)、志向された生成(十四節)、良心(十六節)、価値の図式(十七節)等において、特にそれを学ぶことができる。またオルポートは、人格の独自性、個性を強調し、人格の形成は誕生とともににはじまり、その全生涯を通じて継続されるとのべている。人格の基礎が形成される重要な意味をもった、幼児期の教育を担当する保育者の必

読の書であるといえよう。

またオルポート博士は「人間によってつくり出される戦争」は、「人間の決意によって避けることができる」ことを、全世界に宣言した心理学者たちの最初の人であることを知り、感銘を深くするのである。さらに、オルポート博士が、本書のほん訳許可を求めた訳者の手紙に対する返事のなかに、「私たちは、それ(ほん訳という仕事)による結びつきが、平和と善意の架橋の一端になることを望みたいものです」とかかれていたことが、本書に紹介されているが、博士のこの言葉にふれる時、博士の学問の貢献以上に、博士に対する尊敬と親愛の気持ちをかきたえられるのである。

(北陸学院短期大学)

読書のすすめ

大きな森の小さな家

ワイルダー作

世界傑作童話シリーズ
インガルス一家の物語Ⅰ
小学校中級以上

福音館書店

江波 諄子

はじめて、森と湖のある、カナダの大自然に恵まれた山の中で暮らした時、私は、自分がその広大な自然の中に、身も心も吸い込まれていくのを感じた。つい、一カ月前までの都会での幾何学的な世界から、ゆるやかで、自然な曲線の世界に移ると、

そこには大地に大きく包まれた安ど感と、厳しい自然との戦いがあることを知った。毎日の仕事のひとつひとつが、自然と深くかわり合い、生きる喜びと苦しみがそこから生ずる。私は、できるだけ大きく目と心を開いて、新鮮な世界を全身に受けとめ、毎晩、ベッドに入る前に、記録ノートにその日のでき事を書き綴った。

「Little House in the Big Wood」

は、そのころ、私がすすめられて手にした本である。長い間、アメリカの子どもたちに親しまれてきたその本は、古くて、紙もすでにうす茶色になっていた。そこには、ローラという幼い女の子と、その家族が、森の中で力強く生きていく姿が大変重みをもって描かれていた。

昨年の夏、この本が「大きな森の

小さな家」という題で日本語に訳されて出版されたので、さっそく読み返してみた。アメリカでは、ちょうど、その一年前に、この物語の作者、ローラ・インガルス・ワイルダーの作品が再販され、再びすぐれた作品として、紙上にとりあげられていた。ワイルダー夫人は、自身の生涯記ともいうべきものを、「大きな森の小さな家」をはじめとして、いくつも書き残した。このようにフレッシュな生活記録を、彼女が六十四歳になつてから書き始めたということは、驚くばかりである。さし絵は、「おやすみなさいフランシス」や「白いうさぎと黒いうさぎ」でおなじみの、あのガース・ウィリアムズが、丹精をこめて描き、暖かく、まる味をもったさし絵は、物語の内容を十二分に表現している。

生・き・生・きとした生活とは、普段私
が考えているより、もっと重いもの
であるようだ。それは本当に人間の
基本的な生活ばかりであるけれど、
ひとつ、ひとつが生きている。生活
のひとつま、ひとつまに生きること
への基本的な苦しみと喜びが織り混
じっている。高度に文明が進んで、
何年も経ってからこの世に生まれて
くると、世界はあまりに細分化され
すぎていて、簡単に、初歩的な人間
の基本的生活の形態など、とうてい
つかめなくなってしまう。生きるこ
ういうことが、どんなに厳しく、神聖
で、味わい深いものであるか、ワイ
ルダー夫人が示している。どこもか
しこも人の手の入った国で、自然を
探そうなどというキャッチフレーズ
に触れながら暮らしていると、自然
は何か、優雅で、やさしく、上品で、

甘く、せつなく、ロマンティックに
も思えるけれど、Wildな自然は、も
っと厳しく、戦わねばならないもの
なのである。私自身も、カナダの森
林地帯に生きる人々の生活に触れ、
自然の中で生きる構えをいったんく
ずし、もう一度つくりなおさねばな
らなかった。ワイルダー夫人は、ま
た、自分自身でもあるローラという
物語中の少女を通して、幼い子ども
の世界を、そのとおりに伝えている。
プレゼントにお人形をもらって喜ぶ
ありさま、かあさんの台所仕事のま
わりでうろつく楽しさ、どうしたら
クッキーを公平にわけることができ
るかを考えたり、「どっちが好き」と
たずねる時の子どもへの期待と不安に
満ちた緊張した気持ちなど、いつの
時代でもある、子どものかざらない
生活のひとつま、ひとつまを豊かに

表現している。こんなに何も無い場
所と時代に、どんなに豊かに子ども
たちが遊んで成長していくかを読む
のも楽しい。きっと、それは日本人
の古い生活にも通じることであろう
し、私たち自身の手で、こうした生
活の記録をしっかりと留めておかな
ければならないと思う。「大きな森
の小さな家」は続いて「大草原の小
さな家」、「ブラム・クリークの土手」
(以上既刊)、「シルバー・レイクの岸
辺で」、「農場の少年」と読むと、ロ
ーラ・インガルス・ワイルダーとい
う女性を通して、ひとつの大きなま
とまりをもった膨大な書物として、
きつと私たちの心に力強い生命を感
じさせてくれると思う。

(十文字学園女子短期大学)

岡 政先生 会見記（その二）



小 野 京 子

〈出石幼稚園（岡山市）にて〉

私たちは、遠い昔の大先輩に、いま、ほんとうにお会いすることができると、あれこれはりつめた思いで、案内された部屋の中へ入って行った。

「こんにちは」

めがねをかけて何か見ている方の顔が、私たちの方へ向いた。とても落ち着いた、元氣そうなようだった。

こんなところから、私たちと先生の会話が始まり、私たちは話の中へとけ込んでいった。では、先生のお話を聞いてみましょう。

これは、岡先生のお話を書きとめておいた、その時のメモをもとにして、場面を再現したものです。そして、岡山弁で話さ

れたことを少し直してわかりやすいようにしたこと（以下の「」の部分）をお断わりしておきたいと思います。

〈岡先生のお話〉

☆ 砂と子ども

「砂場に、子どもとおばあさんが見えます。その子はバケツの中へ、シャモジで砂を入れては出し、入れては出していました。それを見ていたおばあさんは、

『そんなことしとるんだったら、はようもう帰ろう（岡山弁）』と子どもに声をかけました。そのおばあさんは、結果——バケツに砂が入ったこと——さえよければいい、という考え方でその子どもの砂を出し入れする活動自身が楽しい、ということ

がわかっていないんです。子どもの没頭している活動こそ、子どもの生命力であり、保育者は、子どもの何々せずにはいられなくて一生懸命な活動（あそび）を大切に助けていかななくてはなりません」

☆ 自然と子ども

「最近、一歳二カ月の子どもと一緒に、毎日近くのボーリング場へ出かけたり、朝、小学校や幼稚園へ散歩に行きます。家とは違って、広いボーリング場などへ来たとき、子どもの顔を見ると気分がぐっと変わるのわかります。こせずかない（こせせしない）、のん気で大きな人物になることを望みます。そのために、動物を愛護してみるのもいいでしょう。」

ボーリング場の帰り、夕暮れの空にお月様が出ていました。一歳二カ月の小さい子どもは、お月様を見て

『ノンノ、ノンノ』

と話しかけてくるのです。（その小さい子どもは、遠い空のお月様をどう感じているのでしょうか。私はふっと心をとらわれました）その時、とても感激してしまいました」

☆ 文明と子ども

「近ごろ、よく新聞で、親が子どもを殺す事件を読みます。（とても、いやだなあという表情をなさりながら）文明が進んで、心配ごとがふえてきてヒステリー気味になって、それに公害も発生して、また、自動車が来ると、アッ危ないとひやひやしている。こういった状況では、神経系統も弱まってしまいます。けれども、なにくそという実行力をもった、少しのことに弱

らない人間。自主、自立、人が何と言おうと自分の考えでぶつかって動いてみる人間。そんなふうに保育したいものであります。そのために、根底において、子どもの生命力を伸ばしてやることが大切なことだと思います」

☆ 友だちが好き

「（ままごと）」

A 『きゅうり下さい。なんぼですか？』

B 『五円』

A 『高い！ 帰ります』

C 『お金がないから？ ええよ』

あそびの中で、子どもはいろいろなことを知っていくのです。ボーリング場にて、一歳二カ月の子どもが、胸に赤いカニの絵のついている洋服を着た子どもと出会いました。（カニの絵

が気に入ったようでした」その二人の子どもたちは、きやあきやあと走りまわって追いかけあいを始めます。子どもたちの顔色は変わります。生き生きとします。子どもは、友だちをとっても欲しています。好きで好きでたまらないようです」

ここで、幼稚園の基礎を考えると、それは総合的集団的にあそぶことであり、その中から生活する力の保育を求めるべく、活動の事実を押えていくことだと思えます。生活経験を広めることだと思えます。そして、気長に失なうことのできない強い生活の力（をめざされた先生のように）を保育していきたいと思えます。

☆ たなばたと指導案

「指導案に、たなばたあそびのねらいとして『夜空の美しさを知る』と書き、子どものおかれている現実（子どもの発達段階と環境の悪さ）を見ないで、無理にそれを教えようと頑張っても困ります。幼稚園では、保育者がたなばたの飾りを作って竹につるす。その楽しそうなようすを子どもが見て作りたくなくなり、そして皆で楽しく遊んでいくことをしたいものです。（ここで、岡先生は、園長格の指導者層にわかってもらわないといけないことが、もっともっとたくさんあると、おっしゃっていた）

ねらいはいくら考えてもいいと思います。けれども、それを直接、子どもにもっていくとはいけないと思います。教育だからといって、大きい者が小さい者へ、外から表だってもっていき過ぎるように思うのです。そうではなくて、まず、素直に子どもと一緒に遊ぶことが大切に思います。そして、そのあそびの中で、保育者が一生懸命考えたり、くじけないでまたやってみようとする姿が、子どもにとって大きな何ものかになるのです。各六領域は表であって、内容ではないのです。内容は、子どもの生活、子どもの自発活動、あそびなのです」

☆ 保育者

まず、岡政先生の保母観（『岡山県保育史』一七三ページ「レーベル館」）を引用したいと思えます。

自由保育の時、子どもと遊ばないで保母室でお互いに雑談している保母は、一番悪い保母である。

自由保育の時、子どもと共に歩き回っている保母は、ややよい保母である。

自由保育の時、子どもの遊びに加わり、子どもと共に走り回っている保母は、大分よい保母である。

さらによい保母は、子どもと共に遊びながらも、子どもをどのように伸ばそうかとたえず思慮をめぐらしている。

最上の保母は、自分で直接幼児を導くのではなく、保育理念に導かれて意図的、計画的にとのえられた環境物とおして間接的に幼児を保育する。

ではお話を続けていきたいと思います。

「子どもの伸びる力（生命力）を育てることが保育ですからいくら保育者が知っていて教えたくても、教育的惜心（おしむ心）をわかっていないといけないと思います。（保母中心の保育ではなくて、子ども中心の保育をさしているのだと思います）フレール先生が幼稚園を建てたのも、子どもの自発活動を助けるためでした。子どもの生命力はあそびであります。保育は、それを助けるところから始まります。外から表だつてねらいを子どもにもっていくのではなく、保育とは、子どもの生命力、あそび、自発活動を伸ばすことなのです。（このことを何度も強調された）自由保育とはいえ、ほっておいていい、というものではありません。自由のはき違えをしては困ります。

保育者は、子ども同志で生き生きとしたあそびがなされるよ

うに、じつとよく見ていて、その環境を整えてやることだと思っています。保育者が直接に子どもの遊びを教える、教えた、ではなくて、環境物（たとえば、いつもとは違った場所にあるスコップ、ゴザ、そして保母の動き）を通して、子どもに自分で夢中でやったという経験を広めてやりたいと思います。子どもは、自分でやれたときは、顔色、目の輝きが違っていきます。岡山県倉敷市にある御国幼稚園は、園児全員（三百名）が充実した生活をしていて、ブラッとした子どもがいないから、一度見せてもらいなさい」

「從野先生（元の岡山大学教育学部附属幼稚園教頭）が、同大学同学部での講義で、環境整備のこと、ひとりひとりを大切にすることを強調されていました」と、松川さんが話をしたところ――

「あの方は、理想的な保育者だと思っています。何年も前になりますが、私が岡山大学附属幼稚園で主任をしていたとき、從野さんが実習に来ていました。そんなある日、たまたま電話を借りに來たのです。その時の電話のかけ方が、とても美しく、気持ちよかったです。私の後任はこの人だと確信して、ずっと育ててきました。とてもいいセンスをもった人でした。

保育者は、ひとりひとりを大切に作る細やかさをもって、親切で人の世話をいとわないう、よく気がきいていることが大切です。そして、私のように年をとったものより、若い美しい先生や、すもうのとれる男の先生、心の豊かな先生がたくさんふえていくことを望んでいます。

まあ、一度、保育を実際にやってもらなさい。やってみるとわからんわ」

《感想》

最後の先生の言葉は、とても痛かった。この会見中、ずっと緊張して、一生懸命聞いていることで精一杯の自分だった。お話の中で、時代、年月の差を感じるところか、遠い昔からのものと、今の私の学んだことと共通しているところをたくさん見つけることができた。岡先生とともにいて、約八十年間の深みや永続性を感じられ、ほんとうにはりつめた気持ちの自分だった。保母としての生活の、ひとりの人間が生きていくことのささは、何だったのだろうか。人間への愛、精一杯やって変化していくことだろうか。

お話している間、先生の生き生きした姿や表情をみていて、とても楽しかった。自分のことを「岡のばばあ」とかおっしゃ

ったりもした。

暑い八月の夏休みに、私たちとの会見のため、岡山市のどまん中の出石幼稚園へ出かけてきてくださった。出石幼稚園の園長先生は、岡先生の大好きな岡山名物大手まんじゅうを持って来てくださった。岡先生は、何か願いごとをなさっているらしく、糖を断っていらして、好きなおまんじゅうを食べないで家の子どもへ、と持って帰ることになさった。

お話の途中で、岡先生は小さなノートに何か書いていらした。そのノートの表紙の裏の、一歳二ヵ月の子どもが初めて書いたという絵をみせてくださった。

岡山弁で話をして、大学での勉強と違って、子どもの生活に近づいたような気がして、また新しい大切なことを学び、勇気づけられました。この会見は、私にとって大変印象的なものでした。

（お茶の水女子大学大学院）

「幼児教育の源流」(Ⅷ)

ロバート・オウエンの幼児教育思想〈その一〉



山根 祥雄

はじめに

過去の偉大な思想家が、魅力あるもの・学ぶべきものとなつてよみがえってくるのは、偉人の生きざま、思想形成、実践などが私たちの教育活動をはぐくむエネルギーを与えてくれるからにちがいない。本稿で筆者がオウエンの幼児教育思想に学びたいと思う視点は、大きくいって、次の二点にある。

まず第一点。世界の幼児教育施設の創始者の一人にあげられるオウエンが、幼児教育をどのようにとらえていたかということ、いいかえると、かれが幼児教育を重視した要因というものを探ること。さらに第二点として、かれの幼児教育思想がどの

ように形成され、どのように実践され、深められていったのかを探ってみること。以上の二点である。

本稿ではオウエンの思想を手ぎわよくまとめるというよりも、むしろかれの生涯を素描する方法をとってみたいと思う。かれの幼児教育思想の展開は、かれの思想一般の軌跡と不可分であると考えられるからである。

幼年時代

世界の、とくに英国の幼児教育を創ってきた人びとの一人であるオウエンが、どのような幼年期を過ごしたのかということ、ときほぐしたい一つの題目である。

オウエンは、一七七一年、北ウエールズ、モンゴメリシャーのニウタウンで生まれた。ニウタウンは当時人口千人あまり、こざっぱりした田舎町であった。父は金物商をかねた馬具商であり、郵便便長であった。

オウエンの性格形成に影響を残したのは熱いフラムマリを飲んだ事件である。そのため内臓をいため、以後かれは食物は簡単なものをごく少量しか食べることができなくなった。しかしこの体験によって、食物の身体に及ぼす影響についていつも注意を怠らないようになり、物ごとを精密に観察し、始終ものを考える習慣ができた、とかれは述懐する。

オウエンは四、五歳のころ、小学校へ通学していた。活発でダンスや音楽も得意であった。当時は、流暢に読め、はつきり書け、算術の四則を解すれば、ひとかどの教育をうけたものとされていた。またこの初歩的な程度の教育が人を教えることの資格とされていた。かれは賢くて、教師の教えるものすべてを学んだといわれ、七歳以降助手教師として二年をすごした。またかれは読書好きな少年であった。牧師、医師、弁護士などから書物を借り、文芸書、歴史、旅行記を読みこなしたといわれる。かれの述懐によればすでに十歳までに、宗教というものの誤りについて確信したという。

以上のようにオウエンは、読書好きで活発な子どもであったことがわかる。さらに、ダンスの相手をめぐっての競争、虚栄、嫉妬、憎悪などをみてとっていたこと、また両親からただ一度受けた折かんにおいて、罰の無益さあるいは有害さに気づいていたことなどは、後年のオウエンのへんりんがあらわれているといつてはいいすぎであろうか。

少年時代

オウエンは、近所の人の商売を一年間手伝った後、田舎町の生活にあきたらず、兄をたよってロンドンに行く。しばらくして、マクガフォッグのもとに店員としておかれた。オウエンはこの実直な実務家の信用をえて、商売のひとつおりを手ほどきされた。店舗に出入する人びとの性格を観察したり、精緻な織物商品に対する細心な心くばりを学んだりした。またオウエンは、一日の労働の前後、公園での散歩、読書、思索、研究をおこたらなかつた。

オウエン十四歳のとき、フリント・パーマ商会に職をえている。この店は風変わりで安いので、商売の回転が早く、仕事は多忙であった。オウエンは貧しい人びとの生活に親しみ、まもなくマンチェスターのサターフィールド商会に就職する。はぶ

りのよい経営上手なこの小売店で、かれは中流階級の人びとと交わった。

こうした仕事についての知識、たとえば、商売の方法、織物の扱い方と識別、さらには読書にわけくれる生活は、オウエンの少年期（十―十三歳）における、いわば修業時代といつてよいであろう。

青年時代

オウエンはやがて、ジョーンズという職工と共同出資で仕事を始めるが、すぐにかれにみきりをつけ、新しく紡績操業を開始する。ちょうど、マンチェスターのドリンクウォーターが支配人を募集しており、オウエンは名のり出て工場と五百人ほどの職工の管理をまかされ、年間三百ポンドの契約が成立する。

二十歳にも満たないオウエンには自信はなかったが、例の入念さで作業を調べあげ、工程を改善した。工場管理はスムーズにいった。オウエンはこれまでの体験から業務を熟知していただけでなく、かれの深い人間洞察力によって人びとの信任をえ、工場内の労働者の規律や訓練はすぐれた成果をあげた。かれはすでに宗教の偏見や常識を克服する過程において、人間形成への洞察をもちはじめていたのである。つまり、人間はその組織

と自然や社会にかこまれている状態との必然的な成果である、という人間性の知識から、他人に対する憤りや悪意は影をひそめ、他人の感情・思想・行動に対して同情すら覚えるようになっていた。オウエンは「生ける機械」としての労働者の状態改善にも気を配り、製品の品質も向上し、細糸の製造業者としての評判があがった。かれは名士の仲間入りをし、「マンチェスター文学哲学会」の会員とも交わる。ここでかれはいわゆる優れた教育を受けた人びとの教養のあやまりにも気づいていくのである。

こうして、ドリンクウォーター工場管理人時代の体験は、やがてニュー・ラナークの実践へと継承されるのであるが、そのころオウエンは、勤勉な人間的で進取な若手織物経営者としての手腕を発揮している。そしてドリンクウォーターとの訣別がまもなくやって来る（一七九四、五年）。

オウエンはついで、マースランドからの共同経営の申し込みによって、工場を始める。そのとき新たな協定がまとまって、「ワット・スト・カンパニーコールドトン紡績会社」の管理をひきうける。操業開始は、ドリンクウォーターのもとを去って、二、三年後のことであった。この紡績工場は着々と盛んになっていった。やがてオウエンはグラスゴウの取引先でデール嬢と出会う。

後のオウエン夫人であるが、かの女との結婚を思案中、おりしも父のデールによってすでに一七八五年操業開始のニュー・ラナーク工場が売りに出ていることを知り、かねて入手の希望をもっていたオウエンは、工場の譲渡を申し出る。やがてオウエンら三人の合資者は、六万ポンドでデール所有のニュー・ラナーク工場を買いとる（一七九七年夏）。二人の合資者の同意をとりつけ、オウエンはニュー・ラナークの「統治」^{ガバナンス}（かれ自身のことば）に着手するのである。一八〇〇年一月、オウエン二十九歳のときであつた。

ニュー・ラナーク統治

以上のように、オウエンがめまぐるしく出資者と離合集散を重ねる過程に、またかれの木綿製造の品質向上と量産化の営みのなかに、木綿工業を中心とするイギリス産業革命の進行が如実に物語られている。

幅広い体験とみずからの洞察によって、オウエンのなかで構築された原理は、「人間の性格はかれのために形成されるのであつて、かれによって形成されるのではない」というものである。この人間の性格形成原理は、環境万能論と極言しなくとも、かれの行動実践原理である。

オウエンによれば、現在人びとが無批判に伝授されている誤った観念から必然的に起こってくる諸結果は無知、罪惡、不幸であり、慈善、正義、道德の原理を破滅させるものである。そして世の中は不調和、競争、戦争、全般の不合理な行為がうずまいている。

オウエンは環境性格形成論に立つて、ニュー・ラナークの統治にとりかかる。それは、利己的な制度の打用ではなく、ドリシクウォーター工場で成功をおさめた、労働者の改善を中枢とする方式を深化徹底させるころみであつた。人間の性格に犯罪を醸成させる傾向のある諸環境を除去し、秩序、規律、節制、勤勉の習慣形成に適当な環境を設定することであつた。ここには資本主義化に対する積極的な対決というよりは、むしろ開明的な工場主としてのオウエンの姿勢がみとれる。

ニュー・ラナークには悪状態がまんえんしていた。この悪環境は、村民に影を落とし、かれらの性格や行動をゆがめていた。大多数の人びとは、怠惰、のんだくれ、うそつき、不誠実、偽信心であり、窃盜を働くものも少なくなかつた。

こうした状態のニュー・ラナーク全体の人びとの改造をはかるくわだては、人間性格の中に犯罪をつくりだす環境を除去することであり、秩序、規律、節制、勤勉の習慣形成に適する環

境を設定することである。そのいみでニュー・ラナークの構想は、人間性に関する正確な知識にもとづく真理と慈しみと愛とによつてきさえられるべき、社会改良をめざす一大実験であった。

さて、当時ニュー・ラナークには、約千三百人が居住しており、四、五百名の貧しい教区徒弟がいた。この子どもたちは、すでにデールによつて、衣服・食物が与えられ、さらに読み、書き（ただし年長のもの）が教えられていた。教師はよい人であつたが、旧式の教授法であつて、かれらを苦しめるだけで効果があらなかつた。かれらの教育は昼間の労働が終わつてからのことであつたし、教育のための費用ねしゅつのために子弟の若年労働も不可避であつた。そのため子どもは、発育不良、不具、逃亡という結果を招いていた。以上がデールの児童対策の失敗の原因であつた。(1)

そこでオウエンのとつた方針は、公立慈善院からの徒弟の廃止、十歳に達するまでの子どもの健康と教育に留意して小児の雇用を廃止した。しかしニュー・ラナークはスコットランドに位置しているので、村人にはオウエンに対する他国人感情があつた。オウエンは村人の偏見による反感と非行をのりこえて、まず、刑罰を廃止し、不和・口論に対しては格言とルールを用

い、村民相互間のしつとには特権廃止、両性間の不規律交渉には罰金などの抑制案、予防規則などの指示・処置を施した。さらにオウエンは、サイレント・モニターという操業簿を考案し、道具改良、工場内改造、住宅の改築など、労働者の福利をはかつた。注目すべきことには、村民の便益として必要な食物や衣類などの一切の商品を共同購入し、原価で供給するようなシステムをとつた。あるいは、労災者や老齢者のための救済基金も設けた。

オウエンにとつては、工場労働者である村人の生活改善と、子弟の教育による村の改造とは、村ごとの改革という同一の地平の上にあつたのである。ここに「新性格形成学院」（以下新学院と省略）の発想が生まれる。住宅の狭さあるいは不設備は、親にも子どもにも有害であり、幼児たちの訓練に不適である。ここに、ニュー・ラナークの青年たちの性格を最も幼い時から成人になるまで十分に形成する設備が不可欠であり、親の手から離れるそもその幼少期から、性格形成の眞の原理にもとつた施設が必要であつた。諸状態を創り、組合わせて、人間性の一切の性能・性向・能力をしかるべく練磨し、それらの一切を使って各性能各性向を規則正しく節制する習慣がつくようにと訓練し、よつてもつて人びとが教育されうる時——その時、

しかもただその時のみこそ、人びとは万人のためのよき、価値ある、優れた性格を形成し、ないしは人を合理的な存在となるように訓練する方法を知るのである。

このように子どもたちを悪い状態からよりよき状態におき、幼児から青少年までの合理的な新しい性格を形成するための、幼児学校その他の学校設置のとりくみをオウエンは着手し始める。しかしながらオウエンの偉大な構想を実施するには多くの障害があつた。まず建物の建造・設備などに費用がけっこうかかるものであるし、親の偏見もある。さらに五人からなる新合資者のうちには、オウエンの構想に不賛成なものもいた。これは、一八〇九年のあのグラスゴーでの競売事件に象徴されている。オウエンの積極的な働きかけによって、ついに一八四四年新合資組織が形成されて、幼児・青少年を含めて約二千五百名の住民のための施設が実際に運用されたのは、一八一六年一月のことであつた。

『新社会観』

ところで、オウエンはかねてより、助教法を考案したベルやランカスターに賛同し、献金などもしていたが、ランカスターのスコットランド訪問のさい（一八一二年）、かれは観迎会の

司会をひきうけた。かれはその席で、貧民子弟のためのランカスター・システムの支持と拡張をうたう。善悪、幸、不幸のみなもとは教育であり、それゆえ幼少期からの教育の社会的意義を強調している。また単なる読み、書き、算よりも、子弟の従順さなどの習慣づけを重要視している。ここにはすでに幼児教育への着目があり、貧民階級間の訓練と教育の結合方式が社会にとっても有益なことの示唆がある。

このランカスター観迎会が機縁となつてまとめられた『新社会観』（第一、二論文一八一二年末、第三、四論文一八一三年初め出版）には、児童教育、労働者の状態改善の原理にもとづく工場経営の理論的方向づけと実践について説明を加えつつ、性格形成に関する理論が展開されている。この『新社会観』は、かれの教育の思想を端的に表わしていると考えられる。またかれの教育思想の生涯的な全体像を表わし、『新学院』の発想がもられていると考えられるので、内容をやくわしく紹介してみたい。

第一論文では、適当な手段を用いれば、どのような性格でも一般に付与できるという原理によって、国民の性格の一般の形成と教育のために合理的な計画をたてることを、国の統治者に対して要求している。つまり、子どもたちを幼年時代からよい

習慣に仕込み、合理的に教育し、労働を有効にし、青年から老年期にわたって心身の健康を増進することによって幸福を増進するような国家的措置を講ずるように要請している。

第二論文前半では、この性格形成論の諸利益についてのべている。つまり、幼年期からこの原理によって教育された子どもは、性格形成論への洞察によって教仲間意見や習慣の理由を見きわめ、個人的な不快や公的な敬意を生ずべき根拠を失い、他人に対して正当な斟酌の感動をもつようになり、思いやりさえもつようになる。子どもは例外なく受動的で、無限な多様性をもつ可塑的な複合体である。したがって的確な注意を払いつつ、賢明な管理が必要である。しかし現状は幼年期から犯罪を教えられ、野放しにされているのである。

第二論文後半において、ニュー・ラナークでの実践に言及している。デールの慈善的な功績をたたえながらも、上述のように失敗の原因を分析している。さらにオウエンは村の不正、犯罪などの抑制策、予防策について、その成功をもうらしているが、とりわけ注目すべきことは、子弟の教育が村人の生活改善と歩調をあわせてはかられることである。

ニュー・ラナークの実践は、オウエンの考えによれば、合理的な訓練と仕事の計画なのである。貧しいもの、無知なもの、

教育や訓練を受けてこなかったもの、拙悪な教育や訓練を受けたものなどに対する、訓練と管理における改革である。したがってこの計画は、下層階級の性格形成と一般的改善のための、国民的な排他的でない制度を提出するための、平明で簡単に実行可能な計画である。合理的な訓練と仕事の計画とは、具体的には性格形成のための国民的制度と、政府による過剰な労働人口に対する仕事の準備にはかならない。しかも性格形成のための国民的制度計画は、あらゆる近代的な教育改善を含み、国内の何びとの子弟をも排除すべきものではないのである。オウエンはこうした合理的訓練と仕事のための立法的処置を政府に訴えるのである。

『新社会観』第三論文において、オウエンはニュー・ラナークの主要事業としての『新学院』について説明を加えている。これは、ニュー・ラ・ナーク訪問者の注目的であって、村人の性格改善・形成のための優良な環境設定であった。満一歳あるいは歩行不能な子どもから村の青年、成人まですべての村人が収容対象である。オウエンの構想によると、一―三歳、三―五歳（この二組が幼児学校）、五―十歳（小学校）、さらに十―二十、二十五歳（青年および成人学校）の三階梯の学校である。幼児学校では幼児に遊びが保障される。小学校では、読み、書

き、算、理解、軍事訓練⁽²⁾が教育され、女兒にはとくに、裁断、仕立て、料理が無料で教えられる。青年・成人学校は、工場で働く労働者の夜間教育施設であつた。

「新学院」では、無叱責、無懲罰であり、個人的な不正はない。子どもは不断に親切に扱われ、授業は親しみやすく合理的なやり方で教えられ、うちとけた対話が重視される。事実の知識が優先され、実物教授が重んぜられる。教材は親しみのあるものから有用、必要な事項へと進むのである。説明は子どもが発達につれてなされるべきである。また屋内、屋外、の教育は調和的になされ、できるかぎり戸外に出て、庭園、果樹園など自然の知識に親しませる。

学院では、子どもたちの幸福に寄与しうるような意見と習慣だけを与える。したがって「仲間をそこなうようなことをしてはならない、仲間の幸福のために全力を尽す」という教訓、原理にもとづいて行動するような習慣を獲得させることが教師の第一の任務といつて過言でない。教師はあらゆる機会をとらえて、各人と他人との利益と幸福の関係を強調することが大切であり、いつてしまえば、これが教育の初めであり、終りである。このとき重視されるのは幼児の合理的な性格形成である。それは容易で確実であり、個人・社会に有益である。ここに幼児学

校設置の意義がある。同時に重視されるのが誤つた教育を受けてきた青年や村人たちに対する教育である。というのも、子どもを正しく訓練するためには、子どもをとりまいてゐる人びとが前もつてよく教育されてゐることが不可欠であるからである。それで村人たちからの善悪の除去と矯正のために、夜間講義が開かれる。冬の間は、週三晩、夜間講義とダンスとが交互に開かれる。そのときの講義の内容は、子どもたちを合理的人間たらしめる正しい教育方法、自分たちの勤労の収入を有益に費やす方法、およびかれらの手に残る収入の剰余を充用して基金をつくる方法などについてである。これらは価値のある知識であり、平明で印象的な言葉でもつて楽しく愉快な方法で講義されるべきである。今日でいえば、社会教育、成人講座とでもいふべきものである。

第四論文はオウエンの原理の政治への応用を扱っている。現行の犯罪を生みだし、とくに貧民の知的・公的悲惨のもとになつてゐる諸法律さらに救貧法の廃止、修正、国教会の教養ないし宣誓の撤廃などという国家規模の改革を要求している。オウエンはそこで犯罪予防をよび人間性格形成のための制度を要求する。そしてこの国家を構成する個々人の性格形成は国家の最大関心事であり、安全、簡易、有効、経済的な統治手段であつ

て、訓練・教育の国民教育制度がのぞまれるゆえんである。最近の貧民の国民的教育はベル、ランカスター、ホワイトブレッドなどによって手がけられているが、不十分であり、教育理論・方法ともにふさわしい貧民のための排他的でない国民教育制度が要請される。この国民的教育訓練の真髄は、個人と国家の将来の幸福に寄与する観念と習慣を青年にうえつけることであり、青年を合理的人間へと教育し、有用な訓練および合理的な性格形成をはかることにあるのである。労働階級の訓練および教育は国民教育制度の整備によってなされるのだが、そのさい次のような法令が不可欠である。つまり①教育制度の適任指導者の任命、②教員養成所の設立、③全土の学校設置、④学校建設・維持のための経費調達、⑤最善の指導方法の計画、⑥適任教師の任命、⑦心身教育の内容、などの施策のための法令である。

さらに、国民教育制度とならんで国家の施策として要請されるのは、労働政策である。国家は失業者の労働利用をあやまっていることについて、労働の価値と需要とに関する定期かつ正確な情報を提供する必要がある。あるいは全求職者に対しての雇用を保障すること、国民的効用をもつ恒久的な仕事の準備が政府の第一の義務である。怠惰な貧民の存在理由を考えるなら

ば、賢明で適切な法律と訓練が必要である。もしも貧困・下層階級の教育および訓練のための国民的制度が効果的になされるならば、かれらはやがてみな自活に足る仕事を発見できるようになるからである。

以上、オウエンの名著『新社会観』を構成している四論文をややくわしく紹介した。ここにもられた思想は、かれの生涯的な背骨をなすものであり、次回でとりあげようとするニュー・ラナーク村の実践目標であったのである。そしてとくに教育の思想は、「新性格形成学院」の実践へと結晶されていくのである。そして何よりも、過重労働、低賃金、児童・婦人労働に象徴される、産業革命の進行に対するオウエンのたたかいの開始である。

注

(次回につづく)

(1)英国最初の夜学校と評価する人もいる。

(2)正しい実施によって、健康、注意力、敏速、秩序などの習慣が形成される。

幼稚園児の教育費について (3)



井手達子
金田和恵
馬場紀子
横田京

三、教育費の詳細

(1) 「幼稚園に入園する時の費用は？」

幼稚園の入園のときには、どのくらいの費用がかかるものだろうか。私たちのこの度の調査は秋の十一月に行なったので、四月の入園の時期にさかのぼって記入してもらうことは、少々むずかしいのではないかと思つたが、入園のために必要であつたいろいろの費用を、選抜料、入園費、施設設備費、そして制服制帽の費用などの項目に分けて記入をお願いした。(寄付金の欄ももうけたのだが、今回調査した幼稚園では一園も寄付金という項目を用いていなかった)。

調査対象の幼稚園数がわずか九園ほどであつたので、その各

園の入園に必要な費用を知ることではできても、金額の平均を出したり、その金額を一般的な費用として結論を出すことはできない。そこで、私たちの調査の内容を検討すると同時に、同じ年度に行なわれた東京都総務局学事課『昭和四十七年度私立幼稚園入園児父兄の諸経費負担額調べ』の調査資料も一しよにとりあげて、一般的な費用についても考えてみた。

私たちの調査の結果は図一に示した。わずか九園の結果をみても、その費用は非常にまちまちであり、最高額と最低額を示すことで、その差をあらわしてみた。この図をみると、入園時の費用だけにかぎってもいかに国立 公立の費用が少ない金額であるかが一目瞭然である。公立では図からもわかるように選抜料も施設設備費用も不要であり、入園費も三百円から六百円

図1 国・公・私立別幼稚園の入園時諸経費 最高最低額

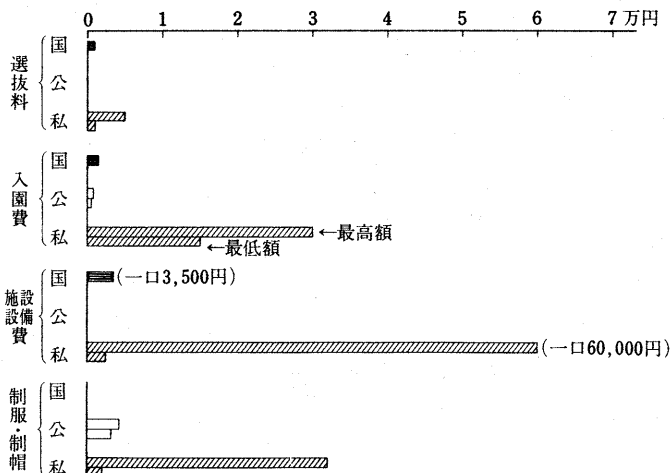
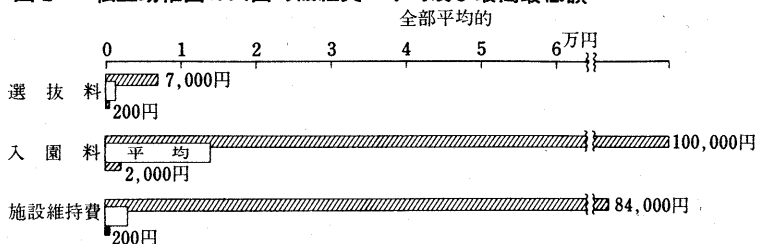


図2 私立幼稚園の入園時諸経費 平均及び最高最低額



昭和47年 東京都総務局学事課調査

ぐらいのわずかの経費ですんでいる。国立の場合は選抜料、入園料ともにわずかの金額であり、制服制帽がないのでその経費もかからず、施設設備費のみが一口三千五百円となっている。私立の場合は幼稚園によってその額は非常にまちまちであり、最高額と最低額には図の上でも大きな差がある。調査した六園の私立幼稚園のうち、選抜料を必要としない園が一園、施設設備費を必要としない園が二園あったので、このような点からも父母の負担のひらきもずいぶん大きいことであろう。幼稚園から大学まで一貫教育をうたっている幼稚園の場合ではすべてに高額で、一口六万円の施設設備費に対して三口分を納めているケースもみられた。

現在国公立幼稚園は数も少なく、いまだ狭き門であり、多くの幼児は私立幼稚園に通うことになる。さて私立幼稚園に入園する時にはどのくらいの費用がかかるものだろうか。若い両親にとってはわが子の入園へのよろこ

びと共に、一つ気にかかることである。

東京都総務局学事課が和年四十七年度に調査した資料をもとに東京都の平均をみてみよう。その費用の平均を図2にあらわしてみた。それによると平均選抜料一、一〇六円、入園料一四、二四四円、施設設備費三、二八一円、以上の三つの費用だけの合計をみると一八、六三一円で制服制帽などは別として約二万円の使用が必要ということになる。私たちの小さな調査の中からも、私立幼稚園については園の経営方針によって、入園時の費用にも非常に大きな差があることがはっきりした。そのため、平均値の金額そのものはあまり参考にはならないかもしれないが、小学校就学前に、幼稚園に在園する幼児の割合が急激に高くなっていることと合わせて、入園時の費用についてもその負担はなるべく軽くすむようにとのぞみたいところである。

(2)園費

園費（幼稚園教育を受けさせるために父兄が支出した経費）の内訳は表1に示したとおりである。この表のように保育料・P・T・A会費・協力費等九費目に分けて集計してある。これらの費目のうち保育料・P・T・A会費・協力費・教材費の四費目については、どの園児も各幼稚園で定められた金額を納入する。

これらに対して絵本代、給食代、行事費、通園費、その他の五費目は園児によって、必ずしも同金額にはならないものである。各費目について、国・公・私立の比較を中心に詳しく考察してみよう。

なお、園費については(1)で示した東京都総務局学事課『昭和47年度私立幼稚園児・父兄の諸経費負担額調査』の結果とも比較したいと思う。この調査は、東京都における全私立幼稚園について行なわれている。

まず、保育料（月謝）は、国公立に比べ、私立は著しく高額である。私立は国立の六〇〇円に対して約七倍の四、一四三円を父兄が負担している。調査した二つの公立は六〇〇円と一、〇〇〇円で、平均八三六円である。私立幼稚園の中でも、保育料はさまざまに調査した六園では、三、六〇〇～五、五〇〇円と開きがあり、都庁調査では、保育料の最高は一一、〇〇〇円、最低は一、九〇〇円、平均三、八八〇円と幼稚園によっても差が非常に大きい。次に園費の中の保育料の割合をみてみると、国立の約14%に対して、私立は約64%と著しく大きく、園費の二分の一以上を保育料が占めている。つまり保育料以外の園費を合計すると、国立三、七〇五円、私立二、二九六円、公立一、六一六円となり、国立が最も多くなっている。

P・T・A会費（母の会費）は、それぞれの幼稚園によって使途は異なるが、二〇〇～四〇〇円が普通であるようだ。参考までに都庁調査によると、P・T・A会費の最高は月約一、一七〇円、一方、年額一〇〇円程度のところで全く徴収しない幼稚園が15%あり、その結果平均二三五円となっている。

協力費という名目では、公立一園、私立二園の計三園で徴収しているのみである。その金額は三〇〇～二、七〇〇円と幼稚園によって非常に異なっている。協力費の内容は、施設・設備・人件費を補うため等の費用となっているところが多い。

教材費は私立が三〇五円と国・公立よりも安く、国立の約半分にすぎない。都庁調査では、最高一、四〇〇円、最低二五円、平均二七七円となっている。

絵本代とは、幼稚園を通じて購入する絵本の代金である。約半数の幼稚園で販売を行っており、強制的に購入させる幼稚園もあるが自由な園が大部分である。しかし、実際は一冊一〇〇円程度のものを一―三冊みんなと同じように購入する園児がほとんどである。

給食費は、お弁当持参の幼稚園が一般的であるので、計上されない園が大部分である。調査を行なった九園のうち、給食を実施しているのは一園（私立）のみであった。実際にはお弁当

代も園費に加えたところである。

行事費は、幼稚園で行なわれる行事（遠足・運動会・お誕生会等）の費用、付き添いの父兄の交通費、写真代を含んでいる。中でも写真代が少なからず含まれている。国立は公立の約五倍私立の約四倍に当る一、六一六円、園費の10%以上を行事費に支出している。

交通費については、私たちの調査では通園バスで送迎している幼稚園は一園もなく、一般交通機関及び自家用車を利用する場合の費用になる、（園児一人の場合、大人と同伴の時は無料なので、付き添いの大人の交通費となる）国立は九七八円と特に高い。前回までも述べたように、遠方から通園している園児の多いことによると思われる。もちろん、この傾向は私立の一部にも見られる。幼稚園教育本来の姿から考えれば、徒歩で通園でき、交通費など不要であるのが望ましいのではないだろうか。

以上、各費目についてみてきた。これら全体を通じて問題に思うのは、各費目、同じ名目で集められても、その使途が幼稚園によってさまざまであるので、この点念頭において比較しなければならぬことである。

単位：円

教材費	絵本代	給食費	行事費	通園費	その他
369 (6.8)	70 (1.3)	69 (1.3)	565 (10.4)	349 (6.4)	227 (4.1)
675 (15.7)	0 (0)	0 (0)	1,616 (37.5)	978 (22.7)	36 (0.9)
377 (15.2)	166 (6.7)	0 (0)	293 (11.8)	87 (3.5)	127 (5.2)
305 (4.7)	59 (0.9)	100 (1.6)	420 (6.5)	288 (4.5)	291 (4.6)

おけいこ	本	おもちゃ	交際費	見入場料	こづかい	楽その他器
1,814 (29.8)	544 (9.0)	622 (10.2)	273 (4.4)	336 (5.5)	130 (2.1)	1,712 (28.2)
2,507 (48.6)	493 (9.5)	460 (8.9)	436 (8.4)	110 (2.1)	16 (0.3)	617 (12.0)
857 (14.6)	836 (14.2)	707 (12.0)	100 (1.7)	201 (3.4)	108 (1.8)	2,879 (48.9)
1,918 (30.3)	480 (7.6)	633 (10.0)	284 (4.5)	416 (6.6)	158 (2.5)	1,638 (25.9)

(3) 家庭教育費

つぎに家庭教育費の実態はどのようなものであろうか。幼稚園児の家庭教育費に関する調査が今までほとんど行なわれていないだけに、私たちは大きな興味と期待をもってこれにとりくんだ。その概略は園費の場合と同様、第一回で報告したので、ここでは主としてその内訳を全平均、および国・公・私立別に検討してみよう。

(a) 全平均

表1に示したように、幼稚園全平均の園児一人当たりの家庭教育費は約六、〇〇〇円と、園費のそれを約五〇〇円も上回っている。その内訳は、学習塾、文房具等の家庭での学習の補助のための費用が約六〇〇円、おけいこ、絵本、おもちゃ等どちらかといえば教養娯楽的な費用が約五、四〇〇円と、教養娯楽的なものへの支出のほうが圧倒的に多く、家庭教育費全体のほぼ90%を占めている。これは園児がまだ義務教育の段階に達していないので、当然教養娯楽的な費用が多くなるにしても、すでに幼稚

表1. 都内幼稚園児の教育費内訳（1ヵ月・1人当たり）

幼稚園	教育費	教育費 総額	園費			協力費
			園費	保育料	P.T.A会費	
全	平 均	11,537 (200.0)	5,449 (100.0)	3,069 (56.3)	252 (4.6)	479 (8.8)
国	立	9,471 (200.0)	4,305 (100.0)	600 (13.9)	400 (9.3)	0 (0)
公	立	8,365 (200.0)	2,479 (100.0)	836 (33.7)	358 (14.4)	235 (9.5)
私	立	12,767 (200.0)	6,439 (100.0)	4,143 (64.3)	194 (3.0)	639 (9.9)

幼稚園	教育費	家庭 教育費	補 助 学 習 費	具 他		教 養 娛 楽 費
				学 習 塾	文 房 具	
全	平 均	6,088 (100.0)	657 (10.8)	385 (6.3)	272 (4.5)	5,431 (89.2)
国	立	5,166 (100.0)	527 (10.2)	0 (0)	527 (10.2)	4,639 (89.8)
公	立	5,886 (100.0)	198 (3.4)	0 (0)	198 (3.4)	5,688 (96.6)
私	立	6,328 (100.0)	801 (12.6)	562 (8.8)	239 (3.8)	5,527 (87.4)

注. () 内は割合を示す。なお教育費総額は園費と家庭教育費の合計である。

園の段階からいわゆる学習塾に通わせたり、英語やフランス語等を習わせている例もわずかながらあるのである。学習塾や語学を習うための費用は1ヵ月約四〇〇円で、家庭教育費の中の6.3%である。またその人数は全園児535人中28人とわずか5.3%にすぎない。教養娯楽費の中では、おけいこの月謝およびそれに伴う費用が約一、八〇〇円と家庭教育費全体の30%を占めて最も多い。

これを第二回で述べたおけいこの状況、すなわち何か一つ以上おけいこをしている園児が全体の約50%を占め、そのうちの三分の二が一種類、残りの三分の一が二種類以上四種類まで習っていることと考えあわせ、おけいこをしている園児のみについてその費用を計算してみると、一ヵ月約三、七〇〇円とさらに高額なものとなる。ついで楽器、自転車といった大きな物品購入のための支出も、個々のものが高額であるだけにその数は少ないにしても家庭教育費に占める割合は大きい。絵本や月刊雑誌を中心とする本代は約五〇〇円、おもちゃ代は約六〇〇円とそれぞれ10%前後を占め、お誕生会やおよばれ等の

交際費、動物園や遊園地等の見学入場料などは5%前後である。現金によるおこづかいは、その使い方が個々の園児によりまちまちで必ずしも家庭教育費の中に含まれるとはいえないが、ここでは便宜上その使用方法の違いにかかわらずおこづかいとして現金で園児に渡されるものがどの程度あるかを、家庭教育費の中に含めて調べてみた。その結果はもらっていない場合もかなりみられた反面、毎日のようにもらっている園児も多く、一ヵ月平均一三〇円であった。

(b) 国立の場合

国立では家庭教育費が約五、二〇〇円と、他の公・私立の平均に比べて最も低い。月謝が他と比べて安く、家庭の収入も比較的高かったため、家庭教育費が高く出るのではないかという私たちの最初の予想ははずれたが、ここでも家庭教育費が園費より約九〇〇円多い。家庭教育費の内訳を大きく補助学習費と教養娯楽費に分けたかぎりでは、前述の全平均とほとんど同じ傾向を示しているが、それぞれをさらに詳細に分けてみるとまた違った傾向がみられる。補助学習費はそのすべてが文房具を中心とする費用で、学習塾へ通う園児は全くみられない。教養娯楽費の中では、おけいこおよびそれに付随する費用が最も多

く約二、五〇〇円と家庭教育費の約49%を占める。いわゆる学習塾へは通わせなくとも、情操教育のためとか、将来何かの役に立つであろうからといった理由でのおけいこには約57%の園児が通い、この割合は他の公・私立に比べて最も高い。家庭教育費の約半分をおけいこのために使っているのが国立の大きな特徴といえよう。また他と比べて交際費が多く、見学入場料や現金によるおこづかい、楽器等の大きな物品購入への支出が今回の調査ではかなり少ない。

(c) 公立の場合

公立では家庭教育費が約五、九〇〇円と国立をかなり上回っており、その大部分の97%までが教養娯楽のための費用で占められている。補助学習費は国立の場合と同様、学習塾等へ通う園児は全くみられず、主として文房具への支出で約二〇〇円である。教養娯楽費の中では楽器その他への支出が最も多く、家庭教育費の約50%を占めている。ただし、これは公立のサンプルの数が少なかった中でたまたまこの月の楽器購入者が他と比べて多かったため、金額が高価なものだけに大きくひびいたものと思われる。ついでおけいこ、本、おもちゃ代等が各々約14%前後を占める。交際費が他と比べて著しく低いのはどうい

原因であろうか。またおけいこに関する費用も国・私立に比べて非常に低い。ちなみに第二回のおけいこを習っている状況を振り返ってみると、習っている園児は約30%で習っていない園児が圧倒的に多い。

(d) 私立の場合

私立では家庭教育費が約六、三〇〇円と国・公・私立の中で最も高く、園費とはほぼ同額である。その内訳は補助学習費の占める割合が他に比べてやや多く、したがってその分だけ教養娯楽的な支出への割合が少なくなっている。補助学習費の中では文房具への支出もみられるが、その大半は学習塾等へ通うための費用で、調査した私立幼稚園六園のすべてに多かれ少なかれの支出がみられた。現在の受験競争はすでに幼稚園の段階から開始されているようである。教養娯楽費は私立のサンプルが多かったせいもあって全平均とは似た傾向を示している。

以上家庭教育費の実態を検討したが、これらのことをまとめると、園児の一ヵ月、一人当たりの家庭教育費は平均五、〇〇〇円から六、〇〇〇円で、国・公・私立による差というよりもむしろ個々の幼稚園による差の方が大きいといえる。またおけいこは園児の約半数が何か習っており、その費用は家庭教育

費の中の約三分の一で二、〇〇〇円前後である。

四、まとめにかえて

これまで三回にわたって、私たちが行なった都内の幼稚園児の教育費調査の結果を報告してきた。そして、園費と家庭教育費とをあわせた教育費総額は、園児一人あたり、公立では約八、四〇〇円、私立では一二、八〇〇円を示し、平均一万円を越すことがわかった。これらの教育費支出額は、家計費全体の中でどのような位置をしめ、それを両親はどのように受けとめているのであろうか。

表2は、園児の家庭の収入階層別に、支出された園費と家庭教育費額とを示したものである。月収が増加するにつれて、教育費総額も増加していくことがわかる。月収八万円未満の家庭における教育費総額は約八、三〇〇円であり、その月収全体の一割を上回っている。園児一人についてこの額であることに留意したい。また、月収十五万円以上の高階層の家庭では、園児一人あたりの教育費総額は約一三、八〇〇円であり、月収八万円の階層より五千円以上多くの教育費支出をしている。

月収八万円未満の家庭の方が、月収のより多い八万円から十二万円未満の階層よりも教育費総額が高いのは、園費の高額な

表2. 収入階層別にみた園費・家庭教育費額

国・公・私立内訳

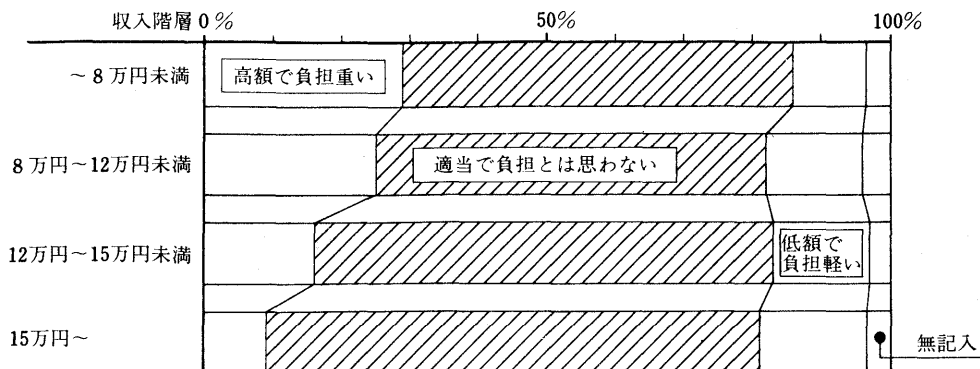
園

単位：円

単位：(%)

収入階層	園費	家庭教育費	教育費総額	国立	公立	私立	全体
～8万円未満	4,617	3,667	8,284	0 (0)	7 (31.8)	15 (68.2)	22 (100.0)
8万円～12万円未満	4,552	3,430	7,982	15 (11.6)	32 (24.8)	82 (63.6)	129 (100.0)
12万円～15万円未満	5,324	7,496	12,820	19 (17.3)	15 (13.6)	76 (69.1)	110 (100.0)
15万円以上	6,288	7,556	13,844	38 (17.4)	22 (10.0)	159 (72.6)	219 (100.0)

図3. 収入階層別にみた園費の負担意識



私立幼稚園に通園させている割合が5%ほど高いことが、その理由の一つとしてあげられよう。月謝等の園費の安い国・公立幼稚園に通わせたいが近くに公立幼稚園がないため、やむを得ず私立幼稚園に通わせている。とその意識調査で答えた両親も、この階層に多くみられたといえよう。

図3に表わされるように、園費の支出額を、「高額で負担が重い」ととらえている両親が、約三割と最も多いのもこの月収八万円未満の階層である。十五万円以上の階層で、「高額で負担が重い」ととらえている両親は一割にもならず、「適当で負担だとは思わない」が七割を越え、「低額で負担軽い」とするものも二割近くあった。

幼稚園児にかかる教育費を、小・中・高校でかかる教育費と比較してみたのが表3である。私立がその八割以上をしめる幼稚園に対して、小・中・高校は公立がその教育の大半をしめている。そこで、小・中・高校は、文部省調査による東京都公立学校の教育費をとった。幼稚園の教養娯楽費には、「おもちゃ」が含まれる等、一概にその教育額を比較でき

表3. 学校段階別にみた教育費の家庭負担額（1カ月・1人あたり）

東京都、昭和47年

単位：円

		教育費 総額	学 校 教育費	直 接 支 出	間 接 支 出	家 庭 教育費	補 助 学 習 費	教 養 娛 楽 費
幼稚園	全平均	11,538	5,449	1,435	4,014	6,088	657	5,431
	国 立	9,471	4,305	3,298	1,007	5,166	527	4,639
	公 立	8,365	2,479	946	1,533	5,886	198	5,688
	私 立	12,767	6,439	1,179	5,260	6,328	801	5,527
小学校	公立	8,969	3,052	1,412	1,640	5,917	2,055	3,862
中学校	公立	9,523	4,136	2,093	2,043	5,387	3,039	2,348
高校	公立	9,360	5,281	2,817	2,564	4,079	1,288	2,791

注) 小・中・高校は文部省『父兄が支出した教育費』(昭和45年度) P.P.60～62により、幼稚園調査を行なった昭和47年11月現在額になるよう消費者物価指数を考慮して計算した。

ない点もあるが、園費の全平均五、四四九円が、小・中・高校のどの学校教育費よりも高額であることは、この表からも明らかであろう。幼稚園の大半をしめる私立幼稚園の園費は、公立小学校の二倍以上の額である。園児をかかえている両親は、まだ年齢も若く、多くの場合その収入も小・中学生の両親に比べて低いため、かなりの負担となるであろうと考えた、わたくしたちの予想は、この表からも裏づけられると思うのである。やはり現在の幼稚園教育はかなりのお金がかかるということによってよさそうである。しかし、先の図2でわかるように、園児一人だけの教育費が月収の一割をしめていても、両親の六割近くは「適当で負担とは思わない」と考えているのである。月収の一割といえば、家計の中で住居費や被服費のしめる割合とほぼ同じである。この両親の意識は、子供に寄せる愛情を示していると同時に、「教育投資論」が唱えられ、まだまだ「学歴」のもつ重さが両親の生活実感として感じられる今日の社会における、両親の子どもの教育に対する強い関心と意気込みとを示しているといえないであらうか。また、国・公立と私立との間の園費の差が著しいことも、わたくしたちの予想通りであった。「高額で負担が重い」と感じつつも、絶対数の少ない公立幼稚園に通わず、私立に通わせている家庭が多いこともわかった。家庭教育費も、平均六千円以上と、園費を上回る高額を示すこともわかった。私たちのこのさやかな調査結果が、幼稚園教育に携わる先生方や幼稚園教育に関心を寄せる方々に一資料として生かしていただければ、幸いである。

(おわり)

(お茶の水女子大学大学院 家庭経営)

子どもたちの生きた生活の現場は、実に多くのことがらがいろいろ組んで動いている。もしも、その中にはたらいでいる要因を分析しようとしたならば、

とても複雑なものになるだろう。保育の現場は、それを分析することが仕事なのでもないし、いくつかとり出した要因を組み立てて、それにあてはめて子どもを動かすところでもない。保育

の現場では、一瞬一瞬に、それぞれの子どもいろいろの思いが交錯して動いており、保育者である大人も、その中のひとりである。大人もまた、生きて動いている。そこで保育者のすることとは、自分もその中の一員として、そこで起こっていることに素直に直面し、重要と感じられることをつかみとって動くことであろう。子どものひとりひとりに、輝いた眼と、笑いがあるならば、それはよい保育の場となっていると考えてよい。保育者の側からいうならば、思ってもいなかったことにぶつ

かったという満足感をもって一日の保育を終わることができるようならば、幸いである。

保育者にとって、何よりもいちばんよい書物は、子どもの生きた姿そのものであることに間違いはない。読む者は、その書物の中に身をひたしてよむ。そのときに、字の表面だけを見ていてはわからないことが、見えてくる。

今月号では「読書のすすめ」を、いろいろの方に書いていただいている。子どもの中にあるよいものを見いだすことができるためには、大人の側に、それを感じることでできる心が用意されていなければならない。それは子どもの中にあつて養われるとともに、高尚な精神をもった書物によつて培われる。入り組んで錯綜しているようにも見える。生きた現実の世界に興味を見出すことのできるような、広い教養は、保育者として成長するのに大切なことである。

(津守 真)

幼児の教育第七十二巻第九号

九月号 定価一二〇円

昭和四十八年八月二十五日印刷
昭和四十八年九月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

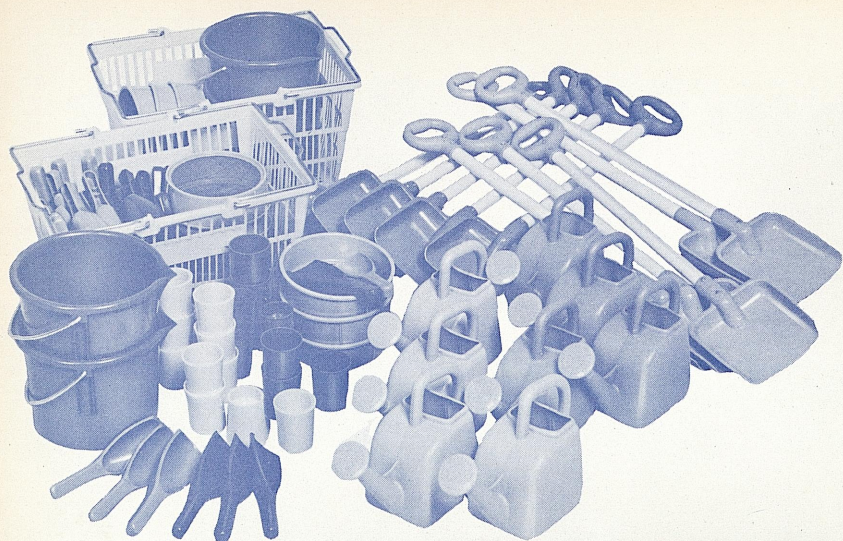
印刷所 凸版印刷株式会社

112 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします



砂場あそびがますます楽しくなります。

砂 場 用 品

●キンダー砂場セット新型

1 セット 6,000円

プラスチックの特性を生かしたカラフルな砂場用品。

- 砂型(4種類)黄・緑…20コ
- シャベル 赤・青…40コ
- フルイ ピンク…10コ
- バケツ 赤…4コ
- 整理用カゴ 黄…2コ

※分売もいたします

●砂型トレイン…………… 1,100円

プラスチックで出来た美しい車体は3輻連結式、砂型は砂場セットと共通して遊べます。

●一輪車…………… 3,400円

幼児向けの鉄製一輪車です。

●ま す…………… 4組1セット 250円

プラスチック製 赤・黄・青・緑

●大型シャベル

1 セット 6,000円

プラスチック製 青……………5本
オレンジ……………5本

●ジョウロ… 1セット 2,800円

プラスチック製 ピンク……………4コ
グリーン……………4コ

●砂場用自動車…………… 350円

木製

●連結汽車…………… 750円

木製

フレーベル館



のびのびと楽しいお絵かき 絵画用品

●キンダー 2 人用画架……10,000円

木製で仕上がりは、堅牢で美しく、格納する時は折りたたみ式で、場所をとりません。

画架（木製・画板の大きさ＝60×60cm）……1脚
パレット（プラスチック製）……2枚
筆立用コップ（プラスチック製）……2個
水入用コップ（プラスチック製）……2個
画用紙どめクリップ（金属製）……4個

●ビニールエプロン……200円

塩化ビニール クリーム色

●絵筆（大）……80円

（小）……60円

●キンダーカラースタンド……2,600円

花型・直径42cmのプラスチック製回転式スタンドに、絵具と筆がセットできます。200cc入りフタ付容器10個、筆立て10個付き。

●ビニカラー……800円

1瓶600cc入り。赤・黄・青緑・青・白・黒・茶・肌

●まんてんこなえのぐ……140円

1缶120cc入り。赤・橙・黄・黄緑・緑・青・紫・水・桃・茶・白・黒

●まんてんカラー……180円

固形の絵の具と8号の筆入り。フタはパレットとして使えます。赤・黄・青・緑・黒・白